





大学コンソーシアム学都ひろさき

# 令和4年度 活動報告集







# ごあいさつ

弘前は5高等教育機関をはじめ、多くの高等学校などが存在する文字通りの学都ですが、単に学生が多いだけでなく、弘前は「学都」と呼ばれるに相応しい風格のある街だと、他の街との比較ではなく、そう思います。加えて、学生は自転車があれば何処にでも行くことができ、「大学コンソーシアム学都ひろさき」の活動も弘前ならではの利点を活用して一層活発になるものと期待しています。

弘前の利点はそれにとどまるものではありません。弘前市からはコンソーシアムの活動に予算面や活動面での支援をいただいており、また、市民の皆さんの多大な協力をいただいています。なにより、大学に対する市民の期待にも大きなものがあると思いますので、大学としても地域との連携による教育研究の在り方を追究することに大きな価値を置いています。

いつも申し上げていることですが、特に大学における教育研究は多様でなければなりません。一大学の努力だけではなく、コンソーシアムを主体として地域の自治体や企業、団体の皆さんと連携して活動できることは、「学都ひろさき」に拠点を置く私たち5高等教育機関にとって大きなアドヴァンテージです。そのことを最大限に活用して、未来社会を担う人材の育成に邁進していければと願っています。

「大学コンソーシアム学都ひろさき」の活動を多くの方々に知っていただい て、引き続きご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

令和5年3月 大学コンソーシアム学都ひろさき会長 国立大学法人弘前大学

₩ 福田眞作



# 目 次

# ごあいさつ

令和4年	度活動報告
------	-------

I. 教育事業	
●共通授業	• • • • 1
○インターンシップ受入	$\cdots 23$
●学生地域活動支援事業	
・弘前学院大学地域活性化サークル(弘前学院大学)	• • • • 28
・弘前大学ストリートダンスサークルA. C. T. (弘前大学)	$\cdots 32$
· 弘大囃子組(弘前大学)	• • • • 3 8
<ul><li>・柴田学園大学短期大学部食育研究部(柴田学園大学短期大学部)</li></ul>	$\cdots \qquad 47$
<ul><li>弘前医療福祉大学救急救命研究会(弘前医療福祉大学短期大学部)</li></ul>	• • • • 5 2
·waku waku club (弘前医療福祉大学)	• • • • 5 6
· 看護技術研究会(弘前医療福祉大学)	• • • • 6 1
・成果発表会	• • • • 6 4
Ⅱ.連携推進事業	
● 5 大学合同シンポジウム	• • • • 7 1
●各大学公開講座等助成事業	
・放送大学青森学習センター	• • • • 7 5
• 弘前医療福祉大学短期大学部	• • • • 7 6
・弘前大学	• • • • 7 7
・柴田学園大学短期大学部	• • • • 7 8
・柴田学園大学	• • • • 7 9
Ⅲ.学生交流事業	
●学生団体シンポジウム	• • • • 83
○ひろさき移動キャンパス	• • • • 9 2
○学生委員会「いしてまい」活動	• • • • 9 4

●「令和4年度大学コンソーシアム学都ひろさき活性化支援事業費補助金」対象事業 ○大学コンソーシアム学都ひろさき自主財源実施事業

# 令和4年度活動報告

# I. 教育事業

# 共通授業

#### 1. 共通授業とは

「地域の課題を理解し、地域の発展を考える」をテーマに、地域の課題を具体的に理解しその解決について自ら考えることが出来る人材を育成することを目的に、オムニバス形式で開講している。本講義は平成25年度から開講しており今年で10年目となる。

また、平成28年度から本コンソーシアム加盟大学の弘前学院大学、柴田学園大学、弘前大学の3大学で本授業を単位として認定している。

#### 2. 概要

〇テーマ

地域の課題を理解し、地域の発展を考える。

○目的

青森の地域課題の解決や資源の活用の先行事例を学び、その意義や限界を理解し、地域課題の解決や資源の活用に関するプロジェクトを企画・実施をできるようになること

○内容

1日1課題(テーマ)とし、担当教員、弘前市職員、民間企業社員等が地域の様々な課題について講義を行い、その解決策についてのグループディスカッションやグループ ワーク、フィールドワーク等を行い発表する。

○対象・定員

弘前学院大学、柴田学園大学、弘前大学の学生55名程度

○日時·授業数

令和4年8月23日 (火)、24日 (水)、25日 (木) 9時30分~18時20分

15コマ(1コマ90分×5コマ×3日間)

○会場

ヒロロ4階 市民文化交流館ホール (3日間共通)

#### 3. 受講者数

	2 3 日	24日	25日
弘前学院大学	15名	15名	15名
柴田学園大学	9名	9名	9名
弘前大学	18名	18名	18名
計	4 2名	42名	4 2名



令和4年度の募集チラシ

# 4. 各日の授業

# (1) 8月23日(火)

テーマ	子どもにとっての「遊び場」と地域子育て支援拠点の重要性		
概要	子どもや子育てを取り巻く環境の変化を踏まえて、子育て支援が必要になっている背景や地域子育て支援拠点事業の概要を理解する。そして、弘前市の地域子育て支援拠点事業である弘前市駅前こどもの広場の取り組みについて学び、実際に施設の見学と遊び体験を行う。また、子どもの遊びの意味や環境のあり方について学び、授業全体を通して、遊び場と地域子育て支援拠点の意味について考察する。		
担当教員	柴田学園大学 こども発達学科 准教授 安川 由貴子 講 師 吉田 裕美子		
ゲスト スピーカー	弘前市 こども家庭課 保育士 尾崎 暁子 氏		
協力 教職員等	弘前大学     人文社会科学部     教 授     森 樹男       弘前学院大学     看護学部     講 師 齋藤 史恵       弘前市     企画課     総括主査 古川 真樹		
	【1コマ目】9時30分~10時40分 ・導入アイスブレイク&自己紹介 ・講義の流れの説明 ・子どもを取り巻く環境の変化と子育て支援(安川先生)(講義) 子育てをめぐる現状と課題		
授業の流れ	<ul> <li>流れ</li> <li>【2コマ目】10時50分~12時00分</li> <li>・弘前市の子育て支援と弘前市駅前こどもの広場の取組み(講義)</li> <li>弘前市 こども家庭課 保育士 尾崎 暁子 氏</li> <li>① 弘前市と弘前市駅前こどもの広場が行っている事業解説</li> <li>② 弘前市駅前こども広場の施設紹介</li> </ul>		
授業の流れ	【3コマ目】12時50分~14時00分 ・子どもの環境のあり方について考える(吉田先生)(講義) ①こどもにとっての重要な遊びとは 遊びをして得られる効果 ②こどもの身近な環境について 物的環境、人的環境、自然環境 ③環境を通しての教育 こどもと環境のかかわりをとらえる視点		

#### 【4コマ目】14時10分~16時40分

- ・フィールドワーク、グループワーク、ポスター作成(演習)
- ① 弘前市駅前こどもの広場の見学
- ② 遊び体験 紙コップで実際に遊ぶ
- ③ グループワーク 遊び場と地域子育て支援拠点の意味について考える

#### 【5コマ目】16時50分~18時20分

- ・遊び場と地域子育て支援拠点の意味に対する発表
  - ①講義やフィールドワークで学んだことを活かして、グループワークで考え たことを発表
  - ②協力職員からの講評、本日の総括

#### ~アイスブレイク&自己紹介~



子育てに対するイメージや 子どもの頃好きだった遊びについて 話し合う学生たち

質問は合計3問あり、 答えを付箋に記入して 意見を交換した

#### 授業の様子

「子どもを取り巻く環境の 変化と子育て支援」について 講議する安川先生



~弘前市駅前こどもの広場の取組み~



弘前市の子育て支援と弘前市駅前 こどもの広場について講義する 弘前市子ども家庭課の尾崎氏

#### ==子どもの環境のあり方について考える==



子どもの環境の あり方について 講義する吉田先生

~フィールドワーク、グループワーク (演習) ~

尾崎氏の案内の下、 弘前市駅前こどもの広場 を見学する学生

授業の様子





実際に紙コップで円やタワーを作るなど、 遊び体験を行う学生たち



見学と体験を通して 遊び場と地域子育て支援拠点の 意味について話し合っている様子

付箋を用いて 意見を出している様子

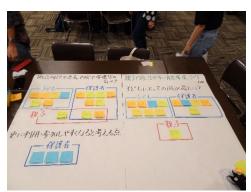
最後の発表に備え 発表資料を作る学生たち



~発表~

授業の様子





グループで話し合われたことを模造紙に書き込み、発表した。地域子育て支援についての意見として、SNSの運用を行うことで子育て支援事業の周知の強化が多く挙げられた





本日の授業全体に対する講評を行う森先生(左)と齋藤先生(右)

授業の様子

講義終了後、 各班の発表資料を見てまわる 学生たち

新型コロナウイルス感染症対策を万全に行った上で、ヒロロ4階の市民文化交 流館ホールで共通授業が開講された。講義では、担当の安川先生、吉田先生だけ ではなく弘前市子ども家庭課の尾崎氏による講義もあったため、様々な視点から 遊び場と地域子育て支援拠点について考えることができる機会になった。

講義冒頭の自己紹介やアイスブレイクの時間では緊張が見られ、なかなか話し 始められないグループも見受けられたが、グループワークが進むと、柔らかい雰 囲気で話し合う様子が見られた。また駅前こどもの広場の見学を行った後のグル ープワークでは、積極的に話し合い模造紙を埋めていく様子が見られた。

まとめ

授業の流れはこどもを取り巻く環境の変化と子育て支援の講義があった後に、 実際に弘前市駅前こども広場で行われている事業や施設の紹介を受け、こどもの 環境のあり方について学んだ。その上でフィールドワークを通して駅前こどもの 広場を体験、見学、遊び体験をした。このように講義と体験や見学を通して遊び 場と地域子育て支援拠点の意味について考えるというものであった。

学生はこの授業を通して、こどもが育つ、育てるために重要な環境、親が必要 としている支援について、学ぶことができた。その上で遊び場と地域子育て支援 拠点の意味について、こども、保護者、親子の視点で利用・参加しやすくなる点 を考えることができた。学生にとってまだ身近ではない子育て支援についてを学 習し、こどもの遊び場や支援拠点の必要性を考えることはいい機会であったとい えるだろう。

#### (2) 8月24日(水)

テーマ	学校保健から	う学ぶ~学校におけ	する保健管理と	保健教育	育の知見を活かす~
概要	保健教育) / を支援し、 容・弘前市	は、トラコーマ・紹 学校教育を支えてき や県内小・中学校の	i核などの健康 た。本授業に 活動事例を学ぶ	問題を おいて、 ぶことに	おける児童生徒の保健管理・ 改善し、子どもの教育・発達 現在の学校保健の基礎的内 より、学生は気づきを得て、 や興味・関心を高めることに
担当教員	弘前大学	教育学部	准教授	新谷	ますみ

TA学生	弘前大学教育学部4年生 4名
協力 教職員等	弘前大学 人文社会科学部 教 授 森 樹男 柴田学院大学 こども発達学科 准教授 安川 由貴子 柴田学院大学 こども発達学科 講 師 吉田 裕美子 弘前学院大学 看護学部 講 師 斎藤 史恵
	【1コマ目】9時30分~11時00分 ・担当教員及びグループ内で自己紹介 ・授業概要の説明 ・児童生徒の健康と学校保健活動(講義)(新谷先生) ①学校保健の目的・領域と内容 ②ライフステージごとの特徴と健康問題 ③青森県(弘前市)の児童生徒の健康・安全に関わる現状と課題
授業の流れ	【2コマ目】11時10分~12時40分 ・弘前市小・中学校の保健管理・保健教育の実際(講義)(新谷先生) ・保健管理の実践事例 ①保健室の機能 ②学校における感染症予防 ③健康診断の実施 ④学校における救急処置 ⑤学校環境衛生 ・保健教育の実践事例(性教育・生活習慣病予防・歯の健康・心の健康等) ・実験1(感染症予防教育)、実験2(生活習慣病予防教育)の説明 ・レポートの作成についての説明
	【3コマ目】13時30分~15時00分 ・保健教育の教材研究への取り組み(講義)(新谷先生) ・実験1(45分) ①感染症予防教育(手洗い実験) ②ワークシートの記入 ・実験2(45分) ①生活習慣病予防教育(食品の塩分濃度測定実験) ②ワークシートの記入
	【4コマ目】15時10分~16時40分 ・個人ワーク 実験に対する考察レポートを作成 ・グループワーク 考察内容を共有、発表内容を整理

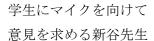
#### 【5コマ目】16時50分~18時20分

- ・グループごとに考察を発表
  - ①個人の意見発表
  - ②協力職員からの講評、本日の総括

#### ~講義~



養護教諭の経験を基に、 「学校保健から学ぶ」のテーマで 講義を行う新谷先生





#### 授業の様子

~実験の準備~

実験の手順と方法について 説明を受ける学生たち





塩分濃度測定実験で用いる カップラーメンのスープを 作る TA

#### ~実験1 手洗い実験への取り組み~



ブラックライトで 手に付いた汚れを観察する学生



ブラックライトで観察している手の平を、スマートフォンで撮影する様子

#### 授業の様子



実験1についてワークシートに記入する学生

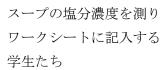
~実験2 塩分濃度測定実験への取り組み~

塩分測定計を用いて カップラーメンのスープの 塩分を計測する学生





濃さを自由に調節した みそ汁の塩分濃度を測り、 それを飲む学生たち



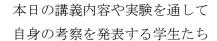


授業の様子



学生の様子を見て回る新谷先生と アドバイスを受ける学生

~発表~











授業の様子

本日の授業の講評を行う森先生(左)と新谷先生(右)

2日目の授業は、日常生活に関わる2つの実験(手洗い実験、塩分濃度測定実験)が行われた。この授業には、担当教員の新谷ますみ先生の「この授業が生活を変えるきっかけになればいい」という思いが込められていた。

授業に参加した学生は、1日目に比べ講義時は緊張が見られたが、実験が始まってからは、ペアワークだったこともあり緊張がほぐれた様子で取り組んでいた。 講義では、新谷先生の約20年間の養護教諭の経験を基に、生徒の実体験を踏まえた学校保健の知識が述べられた。また、手洗い実験では、自身やペアの人の手の汚れを間近で観察したことで手洗いの重要性を感じていた。塩分濃度測定実験では、自身の味覚で感じ、1日に摂取する塩分を計算したことで「自炊する際は薄めの味付けにする」「出汁の使い方を覚える」等、塩分に対する様々なことを考えていた。

まとめ

本日の講義や実験を通して、学生が手洗いの仕方や塩分摂取量について深く考え、健康に気を遣うという意思が感じられた。学生の発表では、自身の健康だけでなく、家族や青森県民など周りの健康にも注目し、「正しい手洗いの仕方」や「減塩」といった健康啓発に係る発言がみられた。本日の授業では、会場の全員に意見を述べる機会が設けられており、全員が考えたことや気付いたこと等を深掘りし、それを発信する良い機会であったとも言える。

# (3)8月25日(木)

テーマ	多言語対応について考える
概要	グローバル化に伴う、訪日・在留外国人の増加によって、多言語対応の重要性が増大している。そこで、多言語対応が求められる状況や方向性、手法を学び、ゲストスピーカーによる弘前市に訪れる外国人観光客データや体験談等を含めた多言語対応の説明をもとに、グループワークを通して、多言語対応について考えを共有することで、弘前市が抱える地域課題について大学生としてどのように考えていくのか、学びを深め検討していく。

担当教員	弘前学院大学	文学部	講師	齋藤	章吾
ゲスト スピーカー	弘前市	観光部観光課	参事	村山	佳光 氏
協力 教職員等	柴田学園大学	人文社会科学部 こども発達学科 こども発達学科 企画課	准教授	安川吉田	由貴子由美子
授業の流れ	・地① Google では、	(クイズ) 対な日本の 日本の 日本の 日本の 日本の 日本の 日本の 日本の 日本の 日本の	( 介介 基ト 時け村の応 時考・料れン グー時 ) 弘義 行 くデ 0多 状説 0 定どほを ー 0 市で グメ 分言佳 明 分 (のし探 プー分 のの で ひし で 一 多 の し な で 一 多 の し な で 一 多 で 一 の ま か し で 一 多 で 一 の ま か し で 一 の ま か し で 一 の し な し で 一 の し な し で 一 の し な で 一 の し な し で 一 の し な し で 一 の し な し で 一 の し な し で 一 の し な し で 一 の の し な し で 一 の の し か し で 一 の の し な し で 一 の の し な し で 一 の の し な し で 一 の の し な し で 一 の の し な し で 一 の の し な し で 一 の の し な し か し で 一 の の し な し か し で 一 の の し な し な し か し で 一 の し な し か し で 一 の し な し か し で 一 の の し な し か し で 一 の の し な し か し で 一 の の し な し か し で 一 の の し な し か し で 一 の の し な し か し で 一 の の し な し か の の し な し か の の し な し か の の し な し か の の し な し か の の し な し か の の し な し か の の し な し か の の し な し か の の の の し な し か の の の の の し な し か の の の の の の の し な し か の の の の の し な し か の の の の の し な の の の の の の の の の の の の し な の の の の	- バト	いて (講義) ば ベント、言葉の点で不便 プで共有

#### 【5コマ目】16時50分~18時20分

- ・多言語対応に対する案の発表と検討
  - ①発表・グループ間での検討

多言語対応について講義で学んだことをもとに、グループごとに発表

②協力教員からの講評・本日の総括

#### ~授業についての説明~

「多言語対応について考える」 を担当する齋藤先生

講義のテーマや流れについて 説明する様子



#### ~アイスブレイク~

#### 授業の様子



#### 自己紹介の内容

- 挨拶
- 名前
- 所属大学
- 趣味/特技

翻訳ツールを使い、異なる 言語で自己紹介を行う学生

何語の自己紹介か、言い当 てるゲームを交えながらア イスブレイクを行った



#### ~講演~



「外国人の観光誘客、受入に おける多言語対応について」 というテーマで講演を行う 弘前市観光課の村山氏



「弘前市のパンフレットの中で 外国人が勘違いしやすいのはどこか」 というクイズを考える学生

クイズについて アドバイスをする村山氏



授業の様子

~グループワーク~





弘前市の観光に関係する資料を集め、弘前市のなかで外国人に訪れてほしい場所やイベント、言葉の点で不便を感じてしまいそうなポイントを探し、グループで新たに多言語対応版を作成する様子

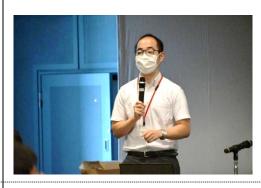
#### ~発表~





授業の様子

グループで話し合われた内容をパワーポイントにまとめ発表する学生 例) QRコードやピクトグラム、ホームページの改善



学生の発表に対して コメントする齋藤先生

3日目の講義では、講師の齋藤先生と弘前市の村山氏が、それぞれ多言語対応 の現状と背景、体験に基づいた多言語対応について講義しており、学生はさまざ まな視点から多言語対応について考えられる機会となった。

はじめ、学生は緊張した面持ちで待機していたが、翻訳ツールを用いた自己紹介を通じて、緊張が解け笑顔で会話している様子が見受けられた。

まとめ

村山氏からは、「外国人の観光誘客、受入における多言語対応について」というテーマで人口減少への対策として外国人受け入れの重要性について講義があり、そのなかで弘前市の優位性や現在行われている取組について、実際の体験談等を含めたエピソードを聞き、学生は多言語対応の重要性や具体的なイメージを掴んでいた。

午後からの講義で行われたグループワークでは、弘前市の観光に関する資料などを各自収集し、そのなかで外国人に訪れてほしい場所やイベント、言葉の点で不便を感じてしまいそうなポイントを探し、それぞれのグループが多種多様な方法の多言語対応について発表を行っていた。

3日目の講義は、グループワーク中心の講義であったため、学生はグループメンバーと多言語対応について活発な議論を行っていた。

#### 5. 単位認定者

○弘前学院大学: 13名○柴田学園大学: 8名○弘前大学: 17名

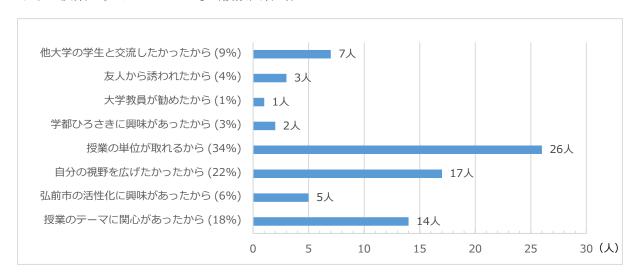
#### 6. 授業アンケート

○実施日 8月25日(木) ○回答者数/出席者数 34名/42名

○回答率 80.95%

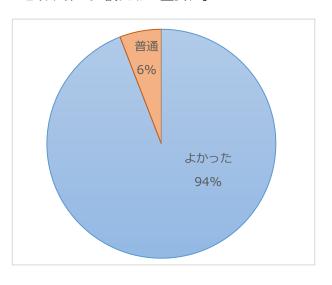
### 【今年度の各授業について】

○なぜ授業に参加しましたか。(複数回答可)



○1日目テーマ「子どもにとっての「遊び場」と地域子育て支援拠点の重要性」について

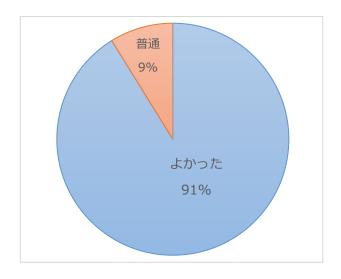
	回答数 (%)
1. よかった	3 2 ( 9 4 %)
2. 普通	2 ( 6%)
3. よくなかった	0 ( 0%)
計	3 4 (1 0 0 %)



#### ○2日目テーマ:

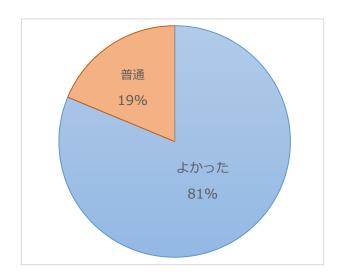
「学校保健から学ぶ~学校における保健管理と保健教育の知見を活かす~」について

	回答数 (%)
1. よかった	3 1 ( 9 1 %)
2. 普通	3 ( 9 %)
3. よくなかった	0 ( 0%)
計	3 4 (100%)



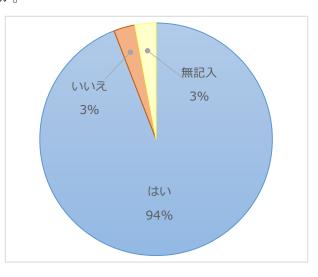
#### ○3日目テーマ「多言語対応について考える」について

	回答数 (%)
1. よかった	26(81%)
2. 普通	6 ( 19%)
3. よくなかった	0 ( 0%)
計	3 4 (100%)



#### ○授業を通して地域の課題に興味を持ちましたか。

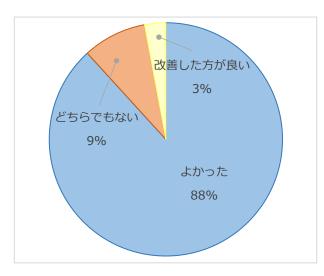
	回答数 (%)
1. はい	3 2 ( 9 7 %)
2. いいえ	1 ( 3%)
3. 無記入	1 ( 3%)
計	3 4 (100%)



- ○あなたが考える地域の課題を記入してください。(一部抜粋)
  - ・電子化があまり広まっておらず、電車は切符を買う必要があり、飲食店も現金しか使えない場合がある。
  - ・就職活動のしにくさ(長期インターンが少ない・就職活動への意欲が低いなど)、LGBTQへの理解が少ないと感じる。(知識として知っていても、自分の周りにいると思っていない人が多いように感じる)
  - ・状況に応じた多言語の対応が改めて大切だと思いました。私たち日本人が受入側の時に、外国人の対応に慣れていないと、言語の違いによってパニックを起こしてしまう可能性があるという課題であると思いました。
  - ・地域の過疎化・空き家の問題
  - ・少子高齢化による伝統を引き継げる若者不足
  - ・子ども、外国人問わずコミュニケーションの少なさ、人と人のやりとりの薄さ
  - ・観光資源が重要とされていることを、地域として認識して、保全に努めること
  - ・若年層、高齢層共に活発な活動ができるようなイベントの催しや、新規の定住者に向けたサポートなどの実施
  - ・少子高齢化、農家の後継者不足、活気がない、子育て支援、高齢者の寝たきり・とじこもりの増加、伝統的なもの・行事の後継者不足、雪や大雨による災害が多い

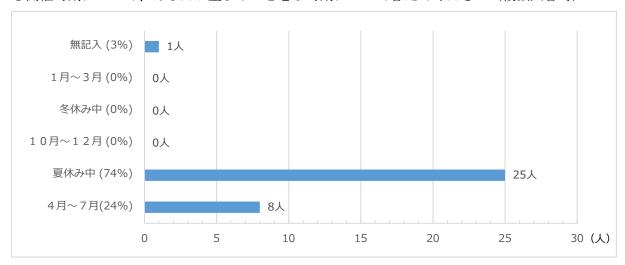
#### ○グループディスカッション・発表の時間割り振り等について

	回答数 (%)
1. よかった	3 0 ( 8 8 %)
2. どちらでもない	3 ( 9 %)
3. 改善した方がよい	1 ( 3%)
計	3 4 (1 0 0 %)



#### 【来年度の授業について】

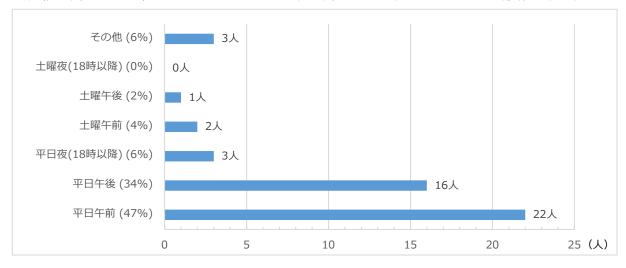
○開催時期について、あなたが望ましいと思う時期について答えてください(複数回答可)



○開催形式について、あなたが望ましいと思う開催形式について答えてください(複数回答可)

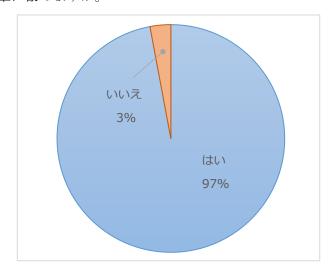


○開催時間について、あなたが望ましいと思う時間について答えてください(複数回答可)



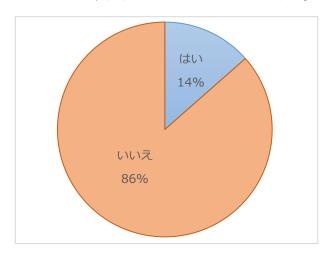
○今回の講義内容・形式の場合、同級生や後輩に勧めますか。

	回答数 (%)
1. はい	3 3 ( 9 7 %)
2. いいえ	1 ( 3%)
計	3 4 (100%)



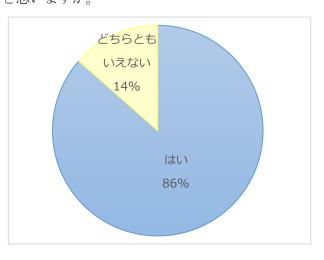
○これまでに他大学の学生と、授業や課外活動などを通じて、交流を図ったことはありますか。

	回答数 (%)
1. はい	4 ( 14%)
2. いいえ	3 0 ( 8 6 %)
計	3 4 (100%)



○今後も他大学の学生と交流を図っていきたいと思いますか。

	回答数 (%)
1. はい	28(86%)
2. いいえ	0 ( 0%)
3. どちらともいえない	6 ( 14%)
計	3 4 (1 0 0 %)



#### ○授業の感想や要望、意見等(一部抜粋)

- ・私の学校では、コロナの影響下で他学年が実習を行っていたため、他大学の人と関わる機会が全 然ありませんでした。その為今回、新たな出会いや発見等に気づくことができ、よかったです。
- ・1年生が各班に1人しかおらず、肩身の狭い思いが3日間。各大学がどのような講義をするのかが気になり、今回参加したが、3日目が一番面白かった。初日はスケジュールがあったが、2日目、3日目にはなくてわからなかった。自分の知識・意見・発想を話し合うのはおもしろかった。
- ・今回の講義を通して、育児支援・保健・グローバル化する社会について多角的な視点から考える 良い機会になったと思う。自治体や県で行っている活動をさまざまな視点から見ることで固定観 念に囚われることなく、いろいろな立場からその活動について知ることができた。
- ・3日間違う内容で、自分が専攻していない分野を学んだり、考えたりすることは新鮮で、それぞれの課題を自分事として考える良い機会となった。また、どの講義でも座学だけではなく、自分でやってみる時間があり、飽きることなく、充実した時間だったと感じた。企画・運営・講義ありがとうございました。
- ・人見知りなので、上手く交流できるか不安だったが、たのしく過ごすことができてよかった。
- ・今回の授業を通して、弘前を活性化するためにどんなことをしたらよいのかについて考える機会となった。講義だけでなく演習、ディスカッション、発表があり、楽しく授業を行うことができた。最終日の多言語対応をテーマとした授業では、海外の人が弘前の観光をしたときに便利になればいいことについて考えたが、このテーマと一緒に障がい者が利用しやすいものなど、誰もが利用しやすくなるためにはどうしたらよいのかについて考えるテーマでもよいと考えた。
- ・普段関わることのない他大学の人たちと交流したことで、考えもしなかった視点からの意見も得られたので、とても良い経験となりました。用意されている時間に見合った課題を設定して欲しい講義があった。
- ・自分の専門外のことについて地域の現状をもとに考えるきっかけとなった。特に1日目の親子を取り巻く環境のあり方についてさらに深く知りたいと思ったため、これから学んでいきたいと思った。
- ・他大学の学生と合同で行うことで様々な考え方を学ぶことができた。また、自分の分野だけでなく他分野の話も聴くことができ、視野が広がった気がした。
- ・いつもグループワークをするとしても積極的に発言しない方であるが、今回は自分から意見を出したりできて良かった。多分、メモを使って考えていることをとりあえず書いてそれを紙に貼り付けるといった、話すよりも意見を出すことへのハードルが低いものから始まったから、自然とできるようになっていったのかなと考えた。正直地域のこれからとかは興味を持つことができなかったが、どの講義も面白く参加して良かったと思った。三日間ありがとうございました。

#### 7. 授業の成果

今年度は、「子どもにとっての「遊び場」と地域子育て支援拠点の重要性」、「学校保健から学ぶ ~学校における保健管理と保健教育の知見を活かす~」、「多言語対応について考える」の3つの テーマで開講し、3日間とも趣向を凝らしたプログラムとなった。

3年振りに弘前大学、弘前学院大学、柴田学園大学の3大学が一堂に会して授業を行うことができ、受講した学生からは、「様々な視点から弘前市の課題を捉え直すことができ、対面時では他の人の意見も交えて話し合いができた。」「自身について考え直すことができる観点が多くあった。」「食生活や子供に対することを学び、新しい考えを多く持つことができた。」「地域を盛り上げていくにはどうすれば良いかなど普段の講義では触れないことを考えることができて良かった。」という感想がよせられた。普段の授業では学べない専門外の内容や、他大学・他分野の学生を交えたグループディスカッションによって、講義を聞いているよりもコミュニケーションが取れ交流を深める良い経験となり、学生の自発性や自己啓発を促すことができた。

#### 8. 次年度開講に向けての課題

講義当日は、欠席者もいたため、各班のグループ人数に差が出てしまったこともあった。討論を進める上で問題はないが、自己紹介などの際、所要時間に差が出た。次年度は、授業が始まる前に出席具合などを把握し、グループ編成を見直せるようにすること、また、円滑な授業が行えるよう配慮出来るように工夫することが課題に挙げられる。

さらに、学生の中にはプライベートにあまり踏み込まれたくない、デリケートな学生もいることや、討論が白熱しすぎて相手を傷つけてしまう可能性もあることも視野に入れて、授業内容を検討していく必要性もあると感じられた。

#### 編集

- ①大学コンソーシアム学都ひろさき 事務局
- ②インターンシップ学生

澤田 悠 (弘前大学) 阿部 洸 (弘前大学) 飯村 奎杜(弘前大学) 山内 春輝(弘前大学) 山崎 朝陽(弘前大学)

# インターンシップ受入

#### 1. 概要

○目的

具体的な事業運営を通じて、学生の企画立案力やマネージメント力を養うことに加え、自 治体と大学コンソーシアムが連携することの意義を模索し、地域課題の把握、地域志向力の 向上を目指す。

#### ○業務内容

大学コンソーシアム学都ひろさきが主催する、集中講義「共通授業」の運営業務 ・事前準備・当日運営・授業終了後処理

○受入人数

弘前大学学生 5名

○期間及び時間

令和4年7月25日(火)~8月31日(水) 合計78時間程度

#### 2. 業務内容

#### (1) 事前準備

ガイダンス、名刺作成、挨拶まわり、共通授業会場下見、関係者による全体打合せ参加、授業の準備等



挨拶まわりの様子



「共通授業」打ち合わせの様子



共通授業に向けた 書類作成の様子



会場設営、準備の様子

#### (2) 当日運営

受付、授業の補助等



受付をする様子



打ち合わせの様子



授業内容をメモする様子



実験の準備をする様子



実験道具を運ぶ様子



実験の補助をする様子

# (3) 授業終了後

報告書の作成、インターンシップ終了報告



終了報告の様子



インターンシップ生と事務局の方々

#### (4) インターンシップ参加学生の感想

#### ○弘前大学人文社会科学部3年 澤田 悠

大学コンソーシアム学都ひろさきでは、約1か月間大変貴重な経験をさせていただきました。 このインターンシップを通して、社会人としての成長や課題を沢山発見することができ、学生と して多くの人に支えられていることにも気付かされました。

共通授業の準備・運営に関しては、一つの授業に多くの人が関わり、膨大な時間が費やされて 初めて開講することが出来ることを実感しました。共通授業打ち合わせの際には、共通授業の担 当教員の声を聴き、学生に対してどのような学びをしてほしいのかを知ることができました。学 生として、改めて沢山の授業を受けられることに感謝しなければならないと感じました。

また、社会人として必要なスキルについても学ばせていただきました。挨拶回りでは、社会連携課の方と名刺交換を行い、緊張感があり社会に出る実感が湧きました。準備作業では、主に Word を用いたため、丁寧かつ効率の良い編集能力を身に付けることができました。 さらに、活動初日と共通授業運営を行った3日間はスーツ着用だったため、とても新鮮で気が引き締まりました。

最後に、インターンシップを取り持ってくださった野呂さんや花田さん、天坂さんが優しく接 してくださったおかげで、楽しく作業に取り組むことが出来ました。どんな些細なことでも親切 に教えてくださり、分からないことをさらに追求しようとする意欲が芽生えました。今回のイン ターンシップでの経験を今後の就職活動や社会人としての活動に活かしていきます。本当にあり がとうございました。

#### ○弘前大学人文社会科学部3年 阿部 洸

約1ヶ月のインターンシップの活動で、沢山の経験をさせていただくことで自分自身の成長点と課題点を見つけることができました。また、このインターンシップを通して、授業を運営する 大変さや授業のありがたみを実感することができました。

共通授業の準備作業に関しては、パソコンを用いた作業が多く、特に私はエクセルについて不 慣れだったため時間がかかってしまいましたが、教えていただきながら資料を作成することがで きました。

また、共通授業当日に関しては、自分から行動するということを目標に参加していましたが、 やはり指示を受けてから動くという場面もあったため、主体的に動くということは未だ課題であ ると感じました。しかし、インターンシップ生同士協力しながら活動できた点は良かった点であ ると考えます。

最後になりますが、約1ヶ月という長い間インターンシップ生として受け入れてくださった事務局の皆さん、ありがとうございました。常にこちらを気にかけてくださり、わからないところがあったら、すぐに指導していただけたことにより、インターンシップの毎日を気負いすぎることなく程よい緊張感で参加することができました。本当にありがとうございました。

#### ○弘前大学人文社会科学部3年 飯村 奎杜

1ヶ月という長い期間のインターンシップでしたが、毎日多くのことを学び、自分に対する課題を見つけ、仲間とともに楽しく真剣に活動することができたため、1日1日が充実していて、今になって思えば1ヶ月間がとてもあっという間であったと感じています。

今までは授業を受ける側の立場でしたが、今回のインターンシップを通して、初めて授業を運営する立場を経験し、1つの授業を行うのに、何日も綿密な計画を練り、打ち合わせを行う必要があることを知りました。そのおかげで私たちは今まで何不自由なく授業を受けることができていたのだとわかり、今後はこのようなお仕事をされている方々への感謝の気持ちを忘れずに授業に臨みたいと考えるようになりました。

今回のインターンシップの活動を通じて、就職し社会に出てからの、自分の長所を活かせる場や、反対に自分の苦手とする分野が少しずつみえてきました。この経験を活かして、残りの学生生活では、長所をより活かせるように伸ばしていき、短所は徐々に改善していきたいです。そうして社会に出てから自分の能力を最大限に引き出せるように日々精進していきます。

最後に、インターンシップを受け入れて下さった事務局の方々には、大変お世話になりました。 いろいろとご迷惑をかけてしまう場面がございましたが、優しく対応して頂いて、本当に感謝しています。この度はとても貴重は経験をさせていただき本当にありがとうございました。

#### ○弘前大学人文社会科学部3年 山内 春輝

今回の大学コンソーシアム学都ひろさきでのインターンシップを通して、授業を運営する立場に立つことで、事前の準備の重要性と運営において多くの人々が関わっているということを学びました。

今回のインターンシップでは、共通授業の計画から書類の作成、備品の準備といった幅広い業務をさせていただきました。書類の作成では、パソコンを使用した業務が中心となり、エクセルやワードといったソフトに触れる機会が多くありましたが、私はこれらのソフトに不慣れだったことから作業に時間を要してしまいました。今後のためにもパソコンの基本的な使い方を学んでおく必要があると思いました。

共通授業本番では、会場の設営から授業のサポート、会場の後片付けまでの一連の業務をさせていただきました。当日はスケジュールを確認し自分に与えられた業務を忘れずに行うことができたと思います。しかし当日は周りの様子を見ながら主体的に動くことを目標としてきましたが、依然として指示を待つことが多く、そのことが自分の反省点であると感じています。

最後になりますが、約1ヶ月間インターンジップ生として受け入れてくださった大学コンソーシアム学都ひろさきの皆様方には、大変お世話になりました。皆様方の丁寧なご指導のおかげで、毎日緊張感を持ってインターンシップ活動に取り組むことができました。本当にありがとうございました。

#### ○弘前大学人文社会科学部3年 山崎 朝陽

今回、大学コンソーシアム学都ひろさきでの約1か月間の活動を通じて、授業運営のサポートをさせていただいたことで、普段何気なく受けている授業の裏には、多くの関係者の方々が関わっていて、綿密な打ち合わせや準備が行われていることを知りました。

インターン生として、備品準備や書類作成、共通授業時のサポートに携わりました。パソコンのスキルが足りずに作業に遅れが出ることもありましたが、ほかのインターン生の協力もあり、何とかやりきることができました。また、はじめは、自分が社会に出ており、自らの行動に大きな責任が伴うことをほとんど理解していませんでした。そのため、言われた業務をこなすだけで、自ら考え動くことを疎かにしていました。しかし、インターン生として活動を続けていくなかで、常に周りの状況を観察し、先回りして行動することを意識する習慣を身に着けることができました。

最後に、インターンシップ生として、至らぬ点の多い私たちを受け入れてくださった事務局の 方々には、大変お世話になりました。いつも優しくご指導いただき、緊張しすぎることなく、活動できる雰囲気づくりをしてくださったおかげで、楽しく活動することができました。本当にありがとうございました。

#### 3. インターンシップ受入の成果

今年度は、弘前大学の学生5名をインターンシップで受け入れた。社会人の中に踏み込むことは、学生には緊張する場面でもあるため、始めは馴染めるかどうか事務局側としても心配はあったが、学生自身の向上心や成長が著しく、自然と良い関係を築くことができた。

特に共通授業に主催者側として参加することにより、自分達が普段受けている側の授業の裏では、様々な人の協力があること、準備にも時間がかかることなど、貴重な社会体験をすることができたと、インターンシップ生自身も感じることができていた。

# 学生地域活動支援事業

#### 1. 学生地域活動支援事業とは

学生が企画立案したまちづくり、地域づくりの活動に係る経費の一部を支援する公募型の事業である。地域課題の解決や地域の活性化に繋がる活動を支援し、学生による魅力あるまちづくりの推進を図ること及び地域活動を通じて、学生が地域の一員としての社会的力量を形成することを目的に実施する。

一定の申請条件を満たせば応募でき、応募された活動は本コンソーシアムが実施する審査を経て助成を決定する。

#### 2. 各採択団体、事業及び実績報告

#### (1) 地域活性化サークル(弘前学院大学)

#### 1 事業名称

大学キャンパス内誘致やイベント紹介による飲食店や露店の支援

#### 2 事業実施概要

#### ①実施した事業の概要

新型コロナウイルス感染症拡大により影響を受けた飲食店に対して、キッチンカーを大学内に誘致し、飲食店の販路拡大に貢献した。様々な飲食店の弁当販売により、学生が栄養ある食事を摂取するきっかけづくりを行った。

また、弘前の伝統的な文化である露店を学内に誘致し、露店と学生の繋がりも意識した支援も行った。更に、祭典等のイベントに参加、協力、SNS等での宣伝を行った。

#### ②どのような点を地域課題としてとらえて実施したか

学生は、数年に渡り飲食店に赴くことをよく思われない環境下にあり、地域の飲食店の繋がりが以前に比べ格段に減っていた。そのため、地域との繋がりは年々希薄化していることが課題であった。また、一人暮らしをしている学生は特に食事を十分に摂取しないことも多いことから、キッチンカーにより弁当販売を行ったことで、学生の食事支援にも繋がった。また、祭典等の中止により、露店のみでは生活がままならない方が増えている現状となっていた。今後、弘前から露店が減少していく可能性もあり、地域の大きな課題であった。また、学生や地域住民も露店と触れ合う機会が減ってしまっている。キャンパス内で販売を行ったことで地域の方や学生が露店に触れ合う機会の提供にも繋がった。

#### ③どういった活動が地域活性化に繋がると考え実施したか

飲食店の名前やチラシ等によって詳細を知ることで、学生や地域住民の方が、販売していた飲食店に目を向け、赴く機会にも繋がると考え実施した。新型コロナウイルス感染拡大により、祭り等には参加しづらい学生や地域住民の方にとっても露店と触れ合える場になると

#### 考え、実施した。

#### ④事業を成功するために何を検討し実施したか

飲食店のみの利益とならないように、ポスターやSNSを通して、地域の方に向けた宣伝活動を意識して行った。

#### ⑤事業を実施したことにより、どのような成果が得られたか

「学生や地域住民の方が飲食店を知る機会にもなり、地域の飲食店との架け橋になることや学生や教員、地域の方等が購入することにより、わずかでも飲食店の売り上げに貢献できる。また、学生生活の豊かさにもつながってくる」と考えていた。結果として夏休み前までの弁当販売から、アンケート結果を踏まえて、事業者と話し合いを重ね、夏休み明けから販売する弁当の内容について変更を検討し、後半の売り上げに繋げることができた。また、地域にポスターを掲示したことやSNSで広げたことで、地域の方との交流にもつなげることができた。

同様に、「露店誘致時に学生や教員等が購入することにより、露店経営者の売り上げに貢献することや学生と地域の方が露店等の弘前の文化に触れる機会となり、お互いにとって利益となる。これらをしたことで弘前市のイベント運営にわずかながら貢献できたと考えている。

#### 3 事業実施報告

#### ①アンケート結果

弘前学院大学のキャンパス内で 行った。土手町キッチンカー・弘前 露店共同組合に協力を依頼し、各飲 食店・各露店を対象とした。

事業の補助金は、ポスターや宣伝 費等、感染症対策の物品に充てた。 また、地域の方へも周知していくこ とを目的にし、町内会にポスターを 掲示してもらうように働きかけ、地 域の方がお店を知るきっかけとし た。宣伝時のチラシやポスター、弁 当等に販売業者やイベントなどの QRコードを記載したシールを貼 付し、広く知ってもらった。

②構成員の具体的な人数や役割 サークルメンバー:約20名 役割:キッチンカー、露店との連絡、

日程調整、学生への弁当内容



に関する事前の周知、シール作成、ポスター作製、アンケート作成・集計、経費管理 等はサークルで行った。

#### ③実施スケジュール

- 4月下旬 キッチンカーと打ち合わせ
- 5月下旬 露店商業組合と打ち合わせ
- 5月~7月 キャンパス内でのキッチンカー、露店の誘致
- 5月~12月各種イベント参加、SNS 発信
- 9月 アンケート実施・集計
- 10月~12月 キャンパス内でのキッチンカー、露店の誘致

#### 4 補助金による支援の効果

ポスターやQRの作成ができたことにより、幅広く周知することが可能となった。また、 感染症対策を行うことができ、学生の安全面の確保に繋がった。

#### 5 反省点・改善点

ポスターによる地域住民への周知が後期になってしまったため、より早い段階から作成し、 周知していけるよう改善していく必要がある。

#### 6 特記事項

特になし。

#### 7 事業実施時の写真

#### チリンチリンアイス招致時



焼き芋屋台の誘致ポスター



ねぷた300年祭、最勝院の宵宮参加時(それぞれSNSで情報発信している。)





#### キッチンカーのポスター関連





キッチンカー最終販売日





#### (2) 弘前大学ストリートダンスサークル A. C. T. (弘前大学)

#### 1 事業名称

弘前大学ストリートダンスサークルA.C.T. 定期公演『STEPvol.14』『STEPvol.15』

#### 2 事業実施概要

本事業は若者の減少が著しい弘前市でダンスによる若者の活動の場を活性化すること、大学関係者やダンス関係者での認知度を上げ本団体の活動域を広げることの2つを目的としている。上記の目的を達成するため、STEPの公演とダンス教室を通して弘前市民の主に次世代を担う層に、ダンスの楽しさを知ってもらい、始めるきっかけ作りをした。そして共にダンスシーンを盛り上げ、弘前でダンスイベントを行いやすい土壌を作り、ダンスを通じて関係人口の起点に繋いでいこうと考えた。なぜならストリートダンスは今やサブカルチャーの枠を超え、年齢や国

籍などを問わず様々な場で親しまれており、このような特色が関係人口の形成の手助けとなる からである。

以前のヒアリング審査でいただいた「学外の方を活動に取り込む工夫が必要」とのコメントを参考にし、「弘前市こどもの祭典」で幼児から中学生までを対象としたダンス教室を開き、STEP vol. 15では有観客での公演を実施した。(STEP vol. 14では新型コロナウイルス対策として弘前大学から課外活動に関する規制が出され、無観客での開催となった。)

STEPvo1. 1 4、vo1. 15では多彩なジャンル及びユニットによるダンスショーを開催した。vo1. 14では新型コロナウイルス感染拡大に伴い大学側の規制もあり無観客での披露となったが、SNSでのライブ配信を行い、関係者及びダンスに興味のある方々に視聴していただいた。リアルタイム視聴が604、インスタグラムに載せた動画の視聴数が平均1、819回(1月6日時点)、YouTubeに載せた動画の視聴数が平均229回(1月6日時点)となり、多くの方々にSTEPvo1. 14を見ていただいた。

 $v \circ 1$ . 15では有観客での公演であったのでイベント告知をポスターやSNSなどで発信し、より多くの弘前市民に情報を届けられるよう工夫を行った。また当日来られない方々のために後日 $Y \circ u T u b e$  に各ジャンル、ユニットの動画を投稿した。1 月6日時点での視聴回数は平均2 07回で $v \circ 1$ . 14 と同じく多くの方々に見ていただいた。また来場客にイベントの内容とACTの今後の活動に関するアンケートの回答に協力していただいた。イベントの満足度を $1 \sim 5$  段階で評価する項目では全体の7 0. 4 %が5 段階中の最高評価である5 を選び、残りの2 9. 6 %も5 段階中の4 を選択していた。またACTに今後参加してほしいイベントを尋ねたところ「地域のお祭りのステージに出てもらいたい」との要望が最も多く、次いで「ダンス体験会やダンス教室を開いてほしい」という声が多かった。以上のアンケートの結果から、STE  $P v \circ 1$ . 15 では満足度の高いダンスイベントとなったことが分かった。そのほか、ACTの活動においてダンス教室を開いてほしい、弘前市の祭りに参加してほしいという要望が多いことが分かり、これらの企画を今後の活動に積極的に組み込んでいこうと思う。

弘前こどもの祭典におけるダンス教室では、ジャンルを「カッコいい系(hip-hop、pop、break)」と「可愛い系(K-pop)」の2つに分けてダンスを教えた。この教室の目的は幼児~中学生にダンスの楽しさを知ってもらい、ダンスに興味を持ってもらうことである。受講者は最初こそ初めての動きに対して難しそうな表情を見せていたが、一緒に練習していくと慣れることができ、楽しむ余裕が生まれているようだった。受講者の好みに合わせられるようにジャンルを分けたこと。受講者の年齢に合わせて声かけや教える内容を変えたことが功を奏したと考えられる。受講者から、「ダンスを家でも練習して上手になりたい」「新しい振りを覚えたい」などの感想をいただき、ダンスを始めるきっかけ作りができたことを実感した。

#### 3 事業実施報告

### ① 事業報告・方法

STEPvol. 14

6月26日

開催場所:ヒロロ4階

新型コロナウイルスによる弘前大学の課外活動の規制により無観客で開催した。

イベント内容は9ジャンルと4ユニットの計13組のダンスステージ発表。

本イベントの対象はダンス関係者やダンスに興味を持っている方とした。

弘前市こどもの祭典

11月3日

開催場所:中央公民館岩木館

参加者は14人。

イベント内容はステージ発表と子供向けのダンス教室の2つ。

主に幼児~中学生を対象とし、ダンスを通した表現の楽しさを知ってもらい、ダンスを始める きっかけを作ることを目的とした。イベント終了後も家でダンスを楽しんでもらうために、ダ ンス教室で教えた振り付けの解説動画をYouTubeにアップロードした。

STEPvol. 15

12月10日

開催場所:みちのくホール

来客数は92人。青森県のイベント開催制限の緩和により観客を招いての公演となった。イベント内容はSTEPvol.14と同様に各ジャンルとユニットのステージ発表。弘前市民の主に若年層を対象とした。

本イベントで実施したアンケートの詳細を掲載する。

## 【STEPvol. 15 アンケート】

(5段階評価のアンケートで5が最大、1が最小)

※() 内の数字は回答数

回答者: 27名

〈このイベントをどのように知りましたか。 (複数回答可)〉

- ・SNSの投稿を見た:37%(10)
- ACTメンバーから直接聞いた:66.7%(18)
- ・プレスリリースを見た:0%(0)
- 友達: 3. 7% (1)

〈イベントにはどれくらい満足されましたか〉

- 5 : 7 0. 4% (19) 4 : 29. 6% (8)
- $3 \sim 1 : 0\% (0)$

〈ダンスに興味を持ったり、本団体に興味を持っていただけましたか〉

- 5 : 7 0. 4% (19) 4 : 2 5. 9% (7) 3 : 3. 7% (1)
- $\cdot 2 \cdot 1 : 0\% (0)$

〈このイベントに関する項目について、どのくらい満足されましたか〉

#### 開催場所

- 5 : 5 9. 2% (16) 4 : 3 7% (10) 3 : 0% (0)
- $\cdot 2 : 3.7\% (1) \cdot 1 : 0\% (0)$

#### 開催時期

- $\cdot 5:66.7\% (18) \cdot 4:18.5\% (5) \cdot 3:14.8\% (4)$
- 2 、 1 : 0 % (0)

#### イベントの規模

- 5 : 5 9. 3% (16) 4 : 2 5. 9% (7) 3 : 1 4. 8% (4)
- $\cdot 2, 1:0\% (0)$

〈地域に根差した団体になるために、今後参加してほしいイベントや開催してほしい イベントはありますか (複数回答可)〉

- ・地域のお祭りのステージ:73.9%(17)
- ・弘大祭以外の学祭:21.7%(5)
- ・ダンス体験会やダンス教室:26.1%(6)
- ・一緒に踊るステージ企画:13%(3)
- ・その他:8.6%(2)

## ② 構成員

以下の役員を事業計画の遂行にあたって設置した。

事業統括者:加藤瑞樹

事業統括補助者:渡辺桃佳、及川佳奈、中田笙午

経費管理担当者:一戸愛加

広報担当者:対馬寧音、瓜野未悠、諸橋けいと

③ 実施スケジュール

6月26日 STEPvol. 14

11月 3日 こどもの祭典

12月10日 STEPvol. 15

#### 4 補助金による支援の効果

多くのダンスイベントやダンス教室には観覧料や参加費が必要となるが、今年開催した全てのイベントを無料で開催できたことが最大の効果であると考えられる。会場の設備も十分に使用することができ、妥協のないイベントの開催が叶い、より本格的なエンターテイメントを無料で提供することができた。

## 5 反省点・改善点

今回はイベント告知を1週間前に行ったが、より多くの人に本団体のイベントを認知してもらい、予定を確保してもらう必要があるので開催の3週間以前に行う必要があった。またSTEPvo1.14では無観客での開催となったのでSNSによるライブ配信を行ったが、音源の著作権保護によりライブが強制的に終了してしまう問題が発生してしまった。事前にライブ配信で起こりうるトラブルを想定し、対応策を考えておく必要があった。

STEPvol.15では来場者に向けて、タイムテーブルや各ジャンル、ユニットの特長や 見どころを一言添えたプログラムを配布することで、ダンスの経験がない方でもより公演を楽し むことができるのではないかと考えた。

## 6 特記事項

特になし。

## 7 事業実施時の写真

画像1 STEPvo1. 14インスタライブの最高視聴数





## 画像2 STEPvol. 14 YouTubeの再生回数

Hold up

STEP vol.14 【Hold : up】

弘前大学ストリートダンスサ... 316 回視聴・5 か月前 GIRLS 3:58 STEP vol.14 【GIRLS】 : 弘前大学ストリートダンスサ... 306 回視聴・5 か月前

FREE STYLE

STEP vol.14 [FREE : STYLE]

STYLE」 弘前大学ストリートダンスサ... 118 回視聴・5 か月前

STEP vol.14 【JAZZ】 : 弘前大学ストリートダンスサ... 150 回視聴・5 か月前

*POP* 6:15

STEP vol.14 【POP】 : 弘前大学ストリートダンスサ... 308 回視聴・5 か月前

WAACK 4:47 STEP vol.14 : 【WAACK】 弘前大学ストリートダンスサ...

159 回視聴・5 か月前

HIP HOP

STEP vol.14 【HIP : HOP】

HOP】 弘前大学ストリートダンスサ... 351 回視聴・5 か月前

GUT 3:10

STEP vol.14 【GUT】 弘前大学ストリートダンスサ... 56 回視聴・5 か月前

LOCK 4:53

STEP vol.14 【LOCK】 : 弘前大学ストリートダンスサ... 171 回視聴・5 か月前

Hold up

STEP vol.14 【Hold up】 弘前大学ストリートダンスサ... 316 回視聴・5 か月前



STEP vol.14【BREAK】 : 弘前大学ストリートダンスサ... 577 回視聴・5 か月前

FREE STYLE
2:13

STEP vol.14 【FREE : STYLE】
弘前大学ストリートダンスサ...
118 回視聴・5 か月前

I grade showcase
3:51

STEP vol.14 [1st Grade : Showcase]

弘前大学ストリートダンスサ... 290 回視聴・5 か月前

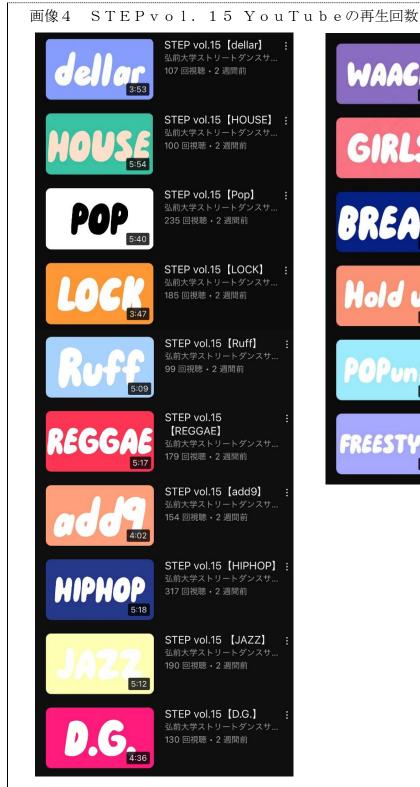
HOUSE 5:20 STEP vol.14【HOUSE】: 弘前大学ストリートダンスサ... 96 回視聴・5 か月前

Tune 2:25 STEP vol.14 【Tune】 弘前大学ストリートダンスサ... 71 回視聴・5 か月前

## 画像3 弘前市こどもの祭典での様子









#### (3) 弘大囃子組(弘前大学)

#### 1 事業名称

ねぷた囃子で弘前を盛り上げよう!

#### 2 事業実施概要

#### ①実施した事業の概要

この事業の目的は、学生及び地域の方々に津軽地方の祭り囃子の演奏に触れてもらうことによって、津軽地方の祭り囃子の技術の継承と地域との交流・活性化を図ることである。

## ②どのような点を地域課題としてとらえて実施したか

祭りへの参加者の減少によって伝統文化が衰退することが地域課題であるとして私たちは 捉えた。その背景に祭り囃子に触れる機会の減少があると考えられた。新型コロナウイルス の影響により、弘前ねぷたまつりにおいては2年連続祭りが中止されたことによって地域の 方々のねぷた離れが懸念されていた。また、イベント等の減少により、伝統文化が発信され る機会も減り、県外からきている大学生等も青森の伝統に触れることが難しい状況であった と考えられる。

## ③どういった活動が地域活性化につながると考え実施したか

地域で行われる祭りや囃子体験などのイベント等に積極的に参加して津軽地方の祭り囃子 を演奏する活動を行うことが地域活性化につながると考え実施した。

- ④事業を成功するために何を検討し実施したか
- ⑤事業を実施したことにより、どのような成果が得られたか

より多くのイベント等で演奏活動を行うため、地域の方々や学生に対して、弘大囃子組について知ってもらうことを目的とし、SNSで弘大囃子組の活動の様子を積極的に発信した。昨年度まではツイッター中心の投稿であったが、インスタグラムの開設に伴い広報担当者を決め、定期的に情報を発信した。それらをきっかけとし、地域で行われるイベントや小学校等で開催される囃子講習会等に参加させていただくことも増え、津軽地方の祭り囃子を演奏する活動を行うことができた。いくつかのねぷた団体と一緒に活動を行うこともあり、弘大囃子組と地域が今後もつながっていくきっかけを作ることができた。

また、私たちが専門的指導を受けることで技術向上を図り、聞く人の関心をより集められるようにした。イベント等では弘前ねぷた、お山参詣登山囃子・下山囃子、五所川原立佞武多、青森ねぶたを演奏することがほとんどであった。それらの演奏技術の向上に加え、今年度は他の地域の囃子の曲目を増やし演奏を披露することができた。

事業開催時のアンケートに関してだが、学校等での依頼事業については、授業の時間内であり、すべての時間を体験や演奏に費やしたり準備を十分に行うことができなかったりしたこと、イベント等でのステージ発表については不特定多数の参加者であることから、アンケ

ート用紙を用いて調査を行うことができなかった。しかし、体験事業では参加者の感想の中で「早く吹けるようになりたい、お祭りに出たい」「授業が楽しかった」などといった声が聞かれた。イベント等ではほとんどの事業で、手拍子や掛け声、踊りを積極的にやってくださった。聞いてくださる方の年代に応じて演奏の囃子の曲目や演奏時間を変えることで、より楽しんでいただけている様子が明らかであった。また、大学講義内での授業をきっかけとして弘大囃子組に参加したというメンバーもおり、県外出身者にも青森の伝統文化に触れてもらいたいという目的を果たせていると感じる。

今年度の事業の中で計17件のイベント等に参加した。多くの依頼に参加させていただいたことを通して、事業の目的であった地域との交流や各々の活動を盛り上げることを概ね達成することができた。地域の人たちに加え、青森県以外の方々にもお囃子の演奏に触れていただき、興味関心を持っていただくことができたと感じる。

#### 3 事業実施報告

#### 【実施スケジュール】

## 6月

- ●和徳小学校演奏依頼
  - ①事業詳細

日時:6月15日(水)、7月8日(金)、7月20日(水)の3日間

各日14:10~14:55

場所:和徳小学校

対象:和徳小学校の4~6年生 約100人

内容:小学生にねぷた囃子を教えたり演奏を見せたりする。

②構成員

事業統括者:黒澤光

広報担当者:葛西凜、小川佳香

経費管理担当者:小川佳香

参 加 人 数:6月15日(水)4人、7月8日(金)6人、7月20日(水)4人

- ●弘前アップルロータリークラブ設立10周年記念式典依頼
  - ①事業詳細

日時:6月18日(土) 18:00~18:15

場所:フォルトーナ

対象:アップルロータリークラブ会員

内容:式典での余興演奏を行う。

②構成員

事業統括者:葛西凜 広報担当者:葛西凜 経費管理担当者:小川佳香 参加人数:5人

- ●大学内講義でのパフォーマンス
  - ①事業詳細

日時:6月24日(金) 16:00~17:30

場所:弘前大学

対象:対象講義受講者

内容:津軽地方の祭りに触れ実際の演奏を見せながら歴史や囃子の演奏方法等を学んで

もらう。

②構成員

事業統括者;五十嵐大智 広報担当者:葛西凜 参加人数:7人

## フ月

- SHIROFES. 2 0 2 2
  - ①事業詳細

日時:7月3日(日) 11:00~11:25

場所: 星と森のロマントピア 対象: SHIROFES. 2022観覧者 内容: ステージにて演奏を行う。

②構成員

事業統括者:五十嵐大智

広報担当者: 葛西凜、小川佳香

参加人数:12人

- ●じゃわめぐ!ミニコンサート
  - ①事業詳細

日時:7月26日(月)、7月28日(火)、7月29日(金) 12:15~12:25

場所:シェリア 対象:弘前大学生

内容:シェリア内で演奏を行う。

②構成員

事業統括者:上山大智 広報担当者:小川佳香 参加人数:10人

## 8月

- ●弘前ねぷたまつり 8月1日(月)
- ●平川ねぷたまつり 8月2日 (火)
- ●弘前市原ケ平町会夏祭り
  - ①事業詳細

日時:8月21日(日) 11:25~11:45

場所:千年交流センター

対象:原ケ平町会夏祭りの来場者

内容:夏祭り内でステージ発表を行う。

②構成員

事業統括者:五十嵐大智 広報担当者:葛西凜 参加人数:7人

- ●学生シンポジウム~あなたのいいねが世界を変える~
  - ①事業詳細

日時:8月27日(土)14:55~、8月28日(日)15:40~

場所: 弘前市民中央広場

対象:弘前市民、イベント観覧者

内容:学生団体@ぼくらし next が主催するイベントへ参加し演奏をする。

②構成員

事業統括者:上山大智 広報担当者:葛西凜 参加人数:7人

- ●特別支援学校
  - ①事業詳細

日時:8月31日(水)10:20~11:00、9月12日(月)10:20~11:0

0

場所:弘前大学教育学部附属特別支援学校

対象:小学部児童17名

内容:1回目 ねぷた囃子の鑑賞、鉦・太鼓の体験を行う。

2回目 体験・指導、一緒に演奏をする。

②構成員

事業統括者:加藤優成参加人数:5人

## 9月

- ●ふれあいデイ
  - ①事業詳細

日時:9月14日(水)10:00~11:30

場所:板柳町公民館

対象:65歳以上の高齢者 約40名

内容:板柳町内に暮らす65歳以上の高齢者に、お囃子を楽しんでいただく。

②構成員

事業統括者:五十嵐大智 広報担当者:葛西凜 参加人数:6人

- ●弘前市民中央広場露店祭り
  - ①事業詳細

日時:9月23日(金)16:00~

場所: 弘前市民中央広場

対象: 弘前市民中央広場で開催される露店祭りの来場者

内容:ステージ演奏で祭りを盛り上げる。

②構成員

事業統括者:小川佳香

広報担当者:小川佳香、葛西凜

参加人数:9人

## 10月

- ●福村公園露店祭り
  - ①事業詳細

日時:10月1日(土)17:00~

場所:福村公園

対象:福村公園で開催される露店祭りの来場者

内容:ステージ演奏で祭りを盛り上げる。

②構成員

事業統括者: 栗林燦 広報担当者: 葛西凜 参加人数: 6人

#### ●板柳高校文化祭

①事業詳細

日時:10月15日(土)17:00

場所:板柳高等学校

対象:板柳高校生17名、保護者、一般来場者

内容:板柳高等学校の文化祭でステージ演奏をする。

②構成員

事業統括者:黒澤光

広報担当者:小川佳香、葛西凜

参加人数:7人

## 11月

- ●ひろさきりんご収穫祭
  - ①事業詳細

日時:11月6日(日)13:00~

場所:りんご公園

対象: ひろさきりんご収穫祭の来場者 内容: イベントステージで演奏をする。

②構成員

事業統括者:柴田香花 広報担当者:葛西凜 参加人数:7人

- ●浪江町復興支援活動成果報告会
  - ①事業詳細

日時:11月19日(土)、20日(日)

場所:浪江町地域スポーツセンター

対象: 浪江町成果報告会参加者、一般観覧者

内容:弘前大学の活動報告会において、青森の紹介を兼ねたお囃子演奏をする。

②構成員

事業統括者: 葛西凜

広報担当者:小川佳香、葛西凜

参加人数:10人

## 12月

## ●お囃子体験会

①事業詳細

日時:12月19日(月)17:45~19:00

場所: 弘前大学 大学会館 大集会室 対象: 弘前大学の留学生 約10名 内容: お囃子の演奏、体験会を行う。

②構成員

広報担当者: 葛西凜 参 加 人 数: 7人

#### 4 補助金による支援の効果

- ・交通費の補助によりサークル員で自己負担せずに移動することができ、依頼演奏を断ることがなかった。
- ・塩ビ笛や楽譜印刷を、依頼の数や参加人数等の状況に応じて追加で購入したり増刷したり することができ、滞りなく活動ができた。
- ・講師謝礼を補助金で賄うことができたことで、現在や今後のサークル活動の維持のために 良い影響となった。

## 5 反省点・改善点

- ・準備不足でアンケートを実施することができなかった。体験を中心とした依頼を受けた際は、事前に相手方に調査を実施したいという旨を伝え時間の確保を図ったり、サークル員で議論を重ねアンケート様式を決定したりしておくという改善が必要である。また、サークル員で共通認識を図っておく。
- ・依頼に出演する人数は昨年に比べ確保することができたが、サークル員で出演する人としない人に偏りがあり、技術の継承や向上という点が不足していると思われる。状況に応じて様々なお囃子をイベント等で演奏することで、より見ている方々の関心を得られると考えている。そのため、誰もが種々のお囃子を演奏し出演できるように、サークル内で教え合いを積極的に行う体制をつくったり、サークル活動時に演奏を披露しあったりするというような活動を取り入れ、イベント等の事業に活かせるようにする。

#### 6 特記事項

特になし。

## 7 事業実施時の写真

事業:弘前アップルロータリークラブ設立10周年記念式典依頼

日時:6月18日(土)



事業:和徳小学校演奏依頼 日時:7月20日(水)



事業:大学内講義でのパフォーマンス

日時:6月24日(金)





事業: SHIROFES. 2022 日時:7月3日(日)





事業:じゃわめぐ!ミニコンサート

日時:7月26日(月)



事業: 弘前ねぷたまつり 日時: 8月1日(月)



事業:弘前市民中央広場露店まつり

日時:9月23日(金)



事業:浪江町復興支援活動成果報告会

日時:11月19日(土)



事業:お囃子体験会 日時:12月19日(月)





## (4) 柴田学園大学短期大学部食育研究部(柴田学園大学短期大学部)

#### 1 事業名称

津軽の食文化伝え隊(つたえたい)『地域・子どもにつなげる「けの汁」伝承プロジェクト』

#### 2 事業実施概要

青森の郷土料理である「けの汁」は現在、若者や子どもたちの間で食べる人が減ってきている。そのため、学校や保育施設での「けの汁」の伝承が重要となる。しかし、「けの汁」の食育活動を行うための教材などがないことが課題であると考えた。また、保育施設で子どもたちに食育を行い、「けの汁」について興味や関心を持ってもらうことで、青森の伝統料理である「けの汁」の継承につながると考えたため、今回の活動を実施した。

「けの汁」について伝えていくためには、私たち自身や食育担当者が「けの汁」の由来や材料、栄養等について知らなければならないと思った。そこで、「けの汁」を知ることを目的とした研修会を開いた。研修会では柴田学園大学短期大学部の北山育子特任教授の『津軽の郷土料理「けの汁」について』の講話と私たち食育研究部による『「けの汁」伝承のために私たちが考える食育』の発表を行った。発表では、木村守克先生の書籍を通して学んだことについて紹介、本学学生を対象にアンケート調査を実施した結果を紹介、食育研究部のメンバーの各家庭でのけの汁を紹介した。研修会終了後には、参加者を対象に、食育教材についてのアンケート調査を実施した。また、食育フェスティバルinヒロロスクエアに参加し、ステージ発表とブースの展示を行った。

その後、保育施設での食育活動を実施するため、指導案や食育教材を作成した。紙芝居の 製作については富士見保育所の藤田咲江先生に何度も助言いただき完成させることができ た。また、私たちが体験に取り入れたい内容を実現させるために、方法や流れについては、 富士見保育所の平山なつ子先生にアドバイスをいただいたことで、具体的な計画ができた。 保育施設での食育活動は藤崎保育所と富士見保育所の2施設で実施した。活動後、実施施設 の保育士、栄養士、給食スタッフを対象に、アンケート調査を行った。

今回の食育活動を通して、子どもたちへの伝え方、対応の仕方などの難しさを実感した。まだ改善すべき点はたくさんあるが、子どもたちに興味・関心を持ってもらえるような分かりやすい食育教材を作ることができたと感じている。保育施設での食育活動後にアンケート調査を実施したところ、いずれの保育所でも約9割が、「今回の食育活動は効果があった」と回答していた。理由として、「残食が少なかった」「食材に興味をもって食べていた」「好き嫌いの多い子がお代わりしていた」という回答があった。また、保育担当者自身も「けの汁」についてより詳しく知ることができたという感想があった。

また、保育所での食育活動は、新聞、テレビで紹介していただき、掲載された新聞記事を 見て、弘前市内の保育施設の方から貸し出しについて連絡をいただいている。申請のヒアリ ング時にいただいたアドバイスをもとに、計画を再考し、活動を意義あるものにできたと感 じている。当初の予定通り、食育教材を貸し出すシステム作りができ、次につながる取組に 発展させることができた。

#### 3 事業実施報告

11月19日 研修会開催

テーマ:郷土料理「けの汁」を知る

内 容:講演『郷土料理「けの汁」について』

講師:柴田学園大学短期大学部 特任教授 北山育子

発表「けの汁伝承のために私たちの考える食育について」

柴田学園大学短期大学部食育研究部

アンケート (けの汁をテーマにした食育に関する質問)

参加者:18人(市内保育施設の栄養士・保育士、学生)

11月27日 食育フェスティバルinヒロロスクエア(毎年11月開催)参加

場 所:ヒロロスクエア

参加者:287人(一般市民)

方法:ステージ発表「けの汁伝承のために私たちの考える食育について」

ブースの展示 (ポスター展示、調理したけの汁と

けの汁の食材を展示)

アンケート (けの汁をテーマにした食育に関する質問)

12月 6日 指導案・教材の作成開始

場 所:柴田学園大学短期大学部

方 法:アンケート結果に基づき指導案および教材を検討

13日 指導案、紙芝居の内容と絵コンテの案が完成

14日 指導案、紙芝居の内容についての助言

場 所:社会福祉法人ふじみ会 幼保連携型認定こども園 富士見保育所

講師:富士見保育所副所長 藤田咲江氏

指導案、紙芝居の絵や流れのアドバイス

15日~ 紙芝居製作と体験で使用する教材づくり

22日 藤崎保育所で打ち合わせ

場 所:社会福祉法人神栄会 藤崎保育所

藤崎保育所所長、藤崎保育所保育士、藤崎保育所栄養士と打合せ

紙芝居の確認、当日の流れの確認

26日 紙芝居の完成版と指導案を確認してもらった

場 所:社会福祉法人ふじみ会 幼保連携型認定こども園 富士見保育所

27日 リハーサル

場 所:柴田学園大学短期大学部

講師 (アドバイザー) 富士見保育所栄養士:平山なつ子氏アドバイスをもとに教材の見せ方、言葉選び、立ち位置、

体験の流れを修正

28日 保育所での食育活動の実施

場 所:社会福祉法人神栄会 藤崎保育所

対象者: 49人(4、5歳児)

方 法:食育紙芝居 『どうして「けの汁」を食べるの?』の読み聞かせ

体験を伴う食育活動

①野菜の保存方法 (雪の下に埋める)

②塩わらびと干しゼンマイを体験(五感で表現)

28日 学校に戻り、藤崎保育所での振り返り実施 けの汁の材料である人参、大根、ごぼうを模した被り物の製作を 決定し材料購入

1月10日 藤崎保育所の保育士、栄養士、給食スタッフにアンケート調査を依頼

10日~ 被り物製作

12日 食育活動のリハーサル

場 所:柴田学園大学短期大学部 方 法:食育活動の流れを確認

16日 保育所での食育活動の実施

場 所:社会福祉法人ふじみ会幼保連携型認定こども園 富士見保育所

対象者: 41人(4、5歳児)

方 法:食育紙芝居 『どうして「けの汁」を食べるの?』の読み聞かせ

体験を伴う食育活動

①野菜の保存方法 (雪の下に埋める)

②塩わらびと干しゼンマイを体験(五感で表現)

富士見保育所の保育士、栄養士、給食スタッフにアンケート調査を依頼

※市内保育所に指導案・教材の紹介と貸し出しシステムの案内

2月19日 成果発表会で活動報告

27日 あおもり食育推進大会で展示参加を予定

#### 活動メンバーおよび役割分担

所属	氏名	役割
生活科2年	藤森せれな	事業統括者
生活科2年	幸山朝美	事業統括補助者 (記録)
生活科2年	湯瀬向日葵	材料管理担当
生活科2年	木村寧々	広報担当
生活科2年	工藤茉奈	材料管理担当
生活科2年	佐藤愛結	広報担当
生活科2年	野呂優理	経費管理担当
生活科2年	藤田あさひ	経費管理担当
生活科1年	伊藤柚季	材料管理担当

#### 4 補助金による支援の効果

補助金の支援を受けたことによって、普段食育を行っている方々に講師依頼をすることができ、より子どもたちに合わせた食育教材を作ることができた。特に紙芝居の製作に力をかけることができた。また、子どもに興味を持ってもらい、楽しく話を聞いてもらうための被り物を作るなど、表現の幅を広げるため、細部にまでこだわって活動することができた。

保育施設で実際に食育活動を行う場を用意できたことによって、自分たちが製作した紙芝 居を通して子どもたちにどの程度の話を理解してもらうことができ、どのような効果をもた らすのか知ることができた。

## 5 反省点・改善点

保育施設での食育活動は、想定していた子どもたちの反応と、実際に食育活動を行った際に得られた反応が違ったため、臨機応変に対応するのが難しいと感じた。そのため、一回目の藤崎保育所での食育活動を活かして、練習を繰り返し行い、富士見保育所での食育活動へつなげた。その結果、話のテンポや全体的な流れをその時の状況に合わせて変えることができ、一回目の食育活動より子どもたちの反応が良くなったと感じた。

また、二つの保育施設で野菜や山菜の写真を見せてこれは何かを問いかけたり、わらびやぜんまいに直接触れたり、食べ比べしたりして、感想を言い合うなど、子どもたちが話を聞くだけではなく参加できるようにして、けの汁の野菜や山菜についての話を進めることができた。実際に食育した際にも子どもたちが積極的に声を出している姿が見られた。

## 6 特記事項

特になし。

# 7 事業実施時の写真

## 研修会











保育所での食育活動(左:藤崎保育所、右:富士見保育所)





# 食育紙芝居



#### (5) 弘前医療福祉大学救急救命研究会(弘前医療福祉大学短期大学部)

#### 1 事業名称

親子で学ぼう防災救急教室

## 2 事業実施概要

本事業は、災害時に必要な知識・技術を防災と救急の面から向上させることを目的として事業を実施した。

日本は自然災害が多く、弘前市においては、2020年9月に観測史上最大降水量を記録し、道路の冠水や家屋の浸水等の被害を受けた。また、本事業申請後の出来事であるが「2022年8月豪雨」により弘前市では、自治体から警戒レベル5(最大)である「緊急安全確保」が発令された。比較的災害が少ないといわれる弘前市においても想定外の事態が過去発生している。いつ発生するか予測できない災害に対して、常に防災意識を保つことが重要であると考え本事業の実施に至った。親子を対象とした理由は、災発時の避難行動や避難場所等について家族で考えるきっかけを作ることが本事業の目的である。

当初の計画では、弘前市内の小学校  $4\sim6$  年生とその保護者を対象とした防災救急教室を行う予定だったが、募集人数に達しなかったため対象を中学生まで拡大し再度募集を行った。しかし、新型コロナウイルス感染拡大に伴い延期せざるを得ない状況が続いた。そのため、令和 5 年 1 月 8 日に近隣の町内会のイベントと合同で行うことにした。

実施内容は、町内会のイベントが餅つき大会であったことから「食べ物が喉に詰まったときの対処法」や「心肺蘇生法」、さらに災害時に使える防災グッズや防災知識を寸劇や〇×クイズを用いて楽しく分かりやすいように工夫して実施した。

事業終了後、参加していただいた保護者(33名)を対象にアンケートを実施した。結果は33名中23名で回収率は約70%であった。内訳は男性10名、女性13名で男女比に差はほぼ無かった。「Q1. 令和4年8月に津軽地域で発生した豪雨の際に不安は感じましたか?」という質問に対して、約96%の方が不安に感じたと回答した。また、「Q6. 弘前市

で今後災害(避難せざるを得ないような)が発生すると思いますか?」という質問に対して、 約96%の方が発生すると思うと回答した。しかし「Q4.今回の災害を経験して、それを ふまえて新たな防災対策はしましたか?」という質問に対して、以前から防災対策をしてい る人が約37%いるが、半分以上は特に対策をしていないことが明らかとなった。この事か ら、いつ起こるかわからない自然災害に不安を感じながらも、自分の身を守る行動をしてい る人が少ないことが分かった。最後に「Q8. 今回の防災についての講話(体験)を聞き、 より防災対策をしようと思いましたか?」という質問に対して、約96%の方が「そう思う」 と回答したことから本事業がきっかけでより防災に興味を持った人が増加したと思慮され

心臓が止まった時に実施する応急手当(異物除去法・心肺蘇生法)に関しても、寸劇を交 えながら実施した結果、100%の方から「理解できた」「とても分かりやすかった」等の回 答が得られた。

以上の事から、心肺蘇生法を含め防災の需要も非常に高く、実際に災害が発生した際に役 立つ知識・技術を学ぶ機会がさらに必要だと感じた。

#### 3 事業実施報告

#### ① 具体的な事業報告

小比内農業研修会館にて、小比内町会の親子を対象に防災救急教室を実施した。

申込人数:63名(17世帯)

参加人数:小学生以下30名 中学生1名 大人32名 計63名

#### ② 構成員の具体的な人数や役割

構 成 員:弘前医療福祉大学短期大学部救急救命学科の学生4名

事業統括者:木村由奈 事業統括補助者:水川和香苗 広報担当者:工藤天音 経費管理担当者:田村紗椰

事業当日参加者:木村由奈・遠藤匠・大畑翼・工藤結哉・田中翔太郎・棟方萌

## ③ 実施スケジュール

令和4年 6月16日 ヒアリング審査 8月9~11日 岩手県被災地視察

9月 9日

市内全小学校にポスター配布

コロナ感染拡大で参加者が集まらなかったため 11日

実施日を10月29日に変更

10月14日 対象者を中学生まで拡大し改めて市内全中学校に

ポスター配布

参加者が集まらなかったため実施日を12月中に変更 29日

12月中

実施日を令和5年1月8日に変更(最終決定)

令和5年 1月 8日

事業実施

11~20日 報告書作成

11日~

成果発表会(2月19日)準備

#### 4 補助金による支援の効果

補助金の交付によって、長期保管が可能な上質な用紙を使用し防災ワークシートの印刷と 参加記念品の防災グッズセットを購入し、自宅の玄関等で防災用品とセットで有事の際に使 用できるような物品を配布することができた。また、参加者が増加した分の防災ワークシー トや防災ブース用品の購入費用にも充当することができた。各家庭の災害備蓄品として配布 できたことは補助金による支援効果であると考える。

#### 5 反省点・改善点

大きく分けて2つある。

1つ目は、新型コロナウイルスの感染拡大や規模縮小を見据えた対策を入念に講じるべき だった点である。実施時期に関してはコロナが収束している時期に狙いを定め日時を決定し た。しかし、チラシの配布に伺った小学校から、収束している時期だからこそ学外への不要 不急の外出を減らすことや就学旅行を控えている学年への配慮から学外に出る際の注意喚起 を強く実施していることを後々知ることになった。そのため、対面開催が困難である状況を 想定した計画を練る必要があったと考える。ただ、実施を検討していた事業内容が対面以外 に効果を発揮しないことから、より効果的な内容を精査しコロナ禍でも有益性がある内容を 引き続き模索していきたい。

2つ目は、参加人数を増やすような対策をより模索すべきだった点である。前年度の反省を 活かし、ポスターを配布する範囲の拡大や配布枚数の十分な確保など早い段階で実施できた ため、PRはできたと言えるが人数が集まらなかった。この事に加えて、先のアンケート結 果から危機意識を持っているにもかかわらず、積極的に防災や救急のイベントに参加する人 が少ないことが明らかとなった。したがって、親子が参加しそうなイベントに参画し、防災 を前面に出すのではなく切り口を変えて別な視点から啓発することでより救急・防災の普及 に繋がると考えた。実施内容の大幅な見直し等が必要になるが、防災の視野を広げる意味で も取り組みやすく参加しやすい事業内容に変える必要があると感じた。

#### 6 特記事項

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、事業実施日を令和5年1月8日に行われた町内会と の合同イベントまで延期した。実施内容は減少してしまったが、結果的に当初の募集人数よ り多い対象者の親子に、防災・救急について興味を持ってもらうことができた。さらにアン ケート結果から、実施内容の満足度・理解度が高いという結果が得られた。事業目的である 災害時に必要な知識・技術を防災と救急の面から向上させることに繋がったと感じた。また、

本事業の対象者である親子は今後地域の中核を担っていく存在であることから、有事の際は 町内会や近隣住民の協力が必要不可欠である。大学生として地域の一員として携われたこと、 地域住民が不安に感じていた災害対策の一助になれたことは貴重な機会であると感じた。今 後も継続して地域活動に参画していきたいと改めて思う。

#### 7 事業実施時の写真



↑寸劇の様子



↑配布した防災グッズセット



↑○×クイズに参加している様子



↑○×クイズを出題している様子



↑防災グッズを体験している様子



↑防災グッズ作成の様子

#### (6) waku waku club (弘前医療福祉大学)

#### 1 事業名称

小比内健康生き生きプロジェクト~つなげよう!健康リレー~

#### 2 事業実施概要

#### ①実施した事業の概要

小比内地区住民が、楽しみ、生きがいを見つけながら、健康への関心や健康づくりへの意欲を向上することを目的として、小比内地区の住民と老人クラブ (32人) を対象に(1)健康づくり活動 (健康教室) (2)紙媒体を用いた健康に関する情報提供 (保健だより) を行った。

「健康教育」は老人クラブを対象に2回実施(1回目7月18日、2回目9月13日)した。参加人数は1回目7人、2回目8人で2回連続で参加してくれる方が多く見受けられた。内容はロコモティブシンドローム、フレイルについてクイズなどで説明を行い、参加者が主体的に参加できるように工夫をし、健康教室を実施した。その後、フレイル予防としてボールを用いてのボール体操(準備運動として実施。ボールの押しつぶし、身体の周りでのボール回し、ボール投げ&キャッチ、ボールをつきながらのじゃんけん等を段階的に実施。)と運動会形式のチーム戦で玉入れ、ボール渡しを実施した。

今年度は、昨年度の健康体操のアンケート結果の「足腰が弱くなっている」、「椅子を使用した体操にしてほしい」や「簡単でつまらなかった」といった地区住民の方々の要望を取り入れた運動とした。また、体操の内容について段階的に難易度を上げたため、できない方も楽しめるように学生がサポートしながら実施した。

また、新聞は健康づくりに関する情報提供の機会としてタイトルを「保健だより」とし、小比内地区の全世帯を対象に回覧板で7月・9月・11月の計3回、テーマを設定し発行した。保健だよりのテーマは、7月号「熱中症予防」9月号「7月開催の健康教室の振り返り」11月号「冬の運動不足の解消」とした。保健だよりと一緒に健康教室の告知をパンフレットで小比内地区会長に渡し、配布した。

## ②どのような点を地域課題としてとらえて実施したか

コロナ禍であることで、地区内の高齢者間のつながりが希薄になっていた。また7月に実施した健康教室でも、高齢者同士が交流する機会が少なくなったという声も聴かれた。そのため今年度も地区住民同士が交流でき、かつ健康の保持増進ができる機会を作ることができたらと思い、健康教室を実施した。

#### ③どういった活動が地域活性化に繋がると考え実施したか

地区高齢者を中心とした、楽しく健康増進ができる場を設け、体操などの活動で交流を促すことで、地区全体が活性化することにつながったと考える。そして、参加した住民の方が、健康に関心を持ち、新しい健康維持の秘訣を見出してくれることにもつながると考える。そのような一つ一つの出来事が大きくなり、地区全体の活性化へとつながっていくと考える。

## ④事業を成功するために何を検討し実施したか

ヒアリングで「対象者の把握や健康教室実施後の身体の変化について把握すること」をコメントととしていただいたので、事前に小比内地区の会長さんから参加者の年齢や健康レベルについて、質問をし情報収集を行った。また健康教室実施後の身体の変化について把握することや、今後より良い事業の展開につなげていくためにもアンケートの実施をした。健康

教室の実施については、運動会形式で実施を行った(1回目)ことで、参加者の意欲を良い意味で掻き立てられるような工夫ができたと考える。保健だよりについては、昨年度の内容と重ならないよう工夫しつつヒアリング時のコメントも活かし、コート紙を用いて、研修会館に掲示してもらえるような形とした。このようにすることで教室への参加や地区住民にも見てもらえる機会を作れるのではないかと考えた。(保健だより11月号)

#### ⑤事業を実施したことにより、どのような成果が得られたか

今年度は、昨年度の住民からの要望やアンケートの結果を活かした内容での実施をすることができた。具体的には、「簡単でつまらなかった」という声に対し、健康教室の展開を段階的に行ったことで、フレイル予防により効果のある形で、かつ関心をもってもらいやすいような工夫をして実施することができたと考えた。そして、健康教室で体操を実施する前には講話を取り入れ、健康に関する知識の情報提供をした。そのようにすることで、健康教室での運動実施前の導入の効果をあげたり、参加者の健康意識をより高めることにつなげることができたと考える。それに加え、計2回の実施を通して、アンケートにおいて沢山の声を参加者の方からいただき、その中で、「いつも心のこもった、保健だよりで感謝しています。」という声をいただくことができた。このことはこの事業を継続したからこそ得られた成果であると考える。また、今年度は、健康教室の実施自体を3年生にも参加してもらいながら実施した。健康教室の実際を"実践知"として学ぶ機会はとても貴重であり、3・4年生ともに今後の保健師としての視点である「地域を視て、支えていく」というスキルを身に付けることもできたのではないかと考える。

#### 3 事業実施報告

① 健康教室を小比内老人クラブを対象に7月、9月と2回実施した。会場は、住民が徒歩や車で乗り合わせて来れることを考慮し小比内農業研修会館とした。第1回目は7名(72歳~84歳の男3名、女4名)が参加し、ボール体操、ロコモティブシンドローム予防について実施した。参加者の笑顔が見られ楽しみながら実施している様子であった。アンケートより、体操で腕や肩等、主に上半身に効果があったという事が分かった。

第2回目は8名(72歳~84歳の男3名、女5名)が参加し、認知症予防とコグニサイズについて実施した。参加者の様子として、自身の健康状態に合わせて実施するなど無理せず行なっていた。アンケートより、「身体を動かしながら体操をやるのは大変であった」との声があった。

その他、第1、2回を通して実施後のアンケートより、「楽しく運動できてよかった」、「自分なりに継続しようと思う」、「今回参加していない人にも知らせたい」との意見が聞かれた。

また、保健だよりを7月、9月、11月の計3回発行した。各号学生2~4名で作成した。

#### (内容)

- 7月「熱中症予防、食中毒予防」
- → 熱中症とは、熱中症予防ドリンク、食中毒について、食中毒予防ポイント
- 9月「7月開催の健康教室の振り返り」
- → 健康教室の様子、アンケートの結果
- 11月「冬の運動不足の解消」

→ 運動の大切さ、室内でできるエクササイズ、雪かきエクササイズをテーマとして取り 上げ作成した。

評価アンケートを行った際、「イラストがかわいい」等の意見がありレイアウト、発行回数、掲載内容等は好評であった。また、「腰痛や膝の痛みの予防、対策について掲載してほしい」、「掲載されているストレッチが難しい」と言った具体的な住民の要望も挙げられていた。

健康教室で実施した体操の継続状況についても質問した際、健康教室から6ヶ月経過した12月時点で、継続している人としていない人が約半数ずつに分かれる結果であることが分かった。

#### ② 構成員の具体的な人数や役割

事業統括者(4名):全体的な計画の修正や役割配分、担当教員との打ち合わせ、町内会会長、老人クラブ会長との連絡調整。

事業統括者補助者(4名):統括者の補助

健康教室担当者(12名):健康教室の指導案作成、実施 保健だより担当者(8名):保健だより作成(3回配布)

経費管理担当者 (2名): 予算の管理

#### ③ 実施スケジュール

- 6月 保健だより①作成、健康づくり活動(健康体操)の告知用チラシの配布、体操で使用するパンフレット作成
- 7月 健康教室(体操)実施①、保健だより①配布、次回健康体操②の告知用チラシ配布
- 8月 健康教室(体操)実施②、保健だより②作成
- 9月 保健だより②の配布
- 10月 保健だより③作成
- 11月 保健だより③の配布

## 4 補助金による支援の効果

コロナ禍でもあり、学生が地区住民と接し交流する機会がなかった。その為、補助金の支援を受けたことによって、地区住民の健康についての意識づけや楽しく健康体操をすることによって健康の保持・増進のみではなく、生きがいにつながるような機会を設けることができたと考えられる。また、補助金で購入したボールや作成した自宅でできる体操の方法のパンフレットにより、動機づけ支援につなげることができた。さらに、健康教室実施後のアンケートより、健康体操実施後過半数の方が身体の変化を感じているとの回答が得られた。参加者全員から「また、参加したい」との声があり、「学生の皆さんからパワーをいただいて楽しい」などの声も聞かれた。そのため、この事業を通して小比内地区の住民の皆さんに健康づくりの知識や体操を通して、楽しく健康への関心や健康づくりの意欲を向上することができたと考えられる。

#### 5 反省点・改善点

昨年同様、対象者を小比内地区の高齢者に限定し実施したところ第1回7人、第2回8人と参加者数が少ないように感じられた。それに付随して実施後のアンケートで得られた回答も少なかった。そのため、今回実施した2回目の健康教室では参加者の健康課題を見出すことはできたが、小比内地区における地域課題を見出すことは難しかった。また、対象者が高齢者に限定されているため、今後に向けて、対象の拡大・事業の拡大を図る必要があると考えられる。ヒアリングの助言であったように、まずは、小比内地区での対象の拡大として幼少期からの健康意識を高める健康教育や働き盛り世代への健康教育を行い、地域課題を見出しアプローチをしていきたい。さらに、周辺地区へも事業を拡大させていくことが大切だと考える。

#### 6 特記事項

健康教室では、コロナ禍であることを踏まえ、検温、換気、消毒を実施し、感染予防対策 を徹底し実施した。

小比内地区全世帯へ自宅で実施可能な体操のパンフレットを配布したり、健康教室参加者には健康教室の体操で使用したボールを配布することにより、継続した健康づくりへの取り組みを促した。

この事業を継続するために保健師課程の4年生・3年生にも保健だよりの作成や健康教室の準備・運営に協力してもらった。

2回目の健康教室のアンケート結果から、自由記載の欄に『運動に困っている』『腰痛を感じることがある』などの回答が得られた。そのため、冬の運動不足解消のための運動方法についてのポスターを作成し小比内農業研修会館に掲示した。

#### 7 事業実施時の写真

担当教員との打ち合わせ



老人クラブ会長との打ち合わせ



## 保健だよりの作成



健康教室リハーサル②



3年生への説明



健康教室の開催 (2回目) ①



健康教室リハーサル①



会場設営



健康教室の開催(1回目)



健康教室の開催 (2回目) ②



#### アンケートの実施



町内会長さんへのお礼



ポスター掲示状況



#### (7) 看護後術研究会(弘前医療福祉大学)

## 1 事業名称

日常で使える看護技術!看護の魅力を伝えたい!

## 2 事業実施概要

長引く新型コロナウイルスの流行により、自己の体調管理に対する意識は高まっている。特に弘前地区は県内でも感染者数が多く推移しており、10代・20代の感染者が多く、そこから家庭内感染へ拡大する傾向がみられる。2022年度からは、医療ひっ迫を防ぐために、重症化リスクが低い人においては抗原検査キットを用いての自己検査を行うよう青森県保健衛生課からの依頼がされている。自宅療養者数は昨年度と比べ増加しており、療養期間をすぎても倦怠感や味覚の異常など、何らかの症状が残る場合も多く、自己の体調管理がますます重要となっている。また、全国的には感染拡大とともに病院の受診率が低下しているとも言われており、持病のある方やちょっとした体調不良を感じている方が受診控えをしているのではないかと考えられている。こうした状況で、自らの体調把握の基本であるバイタルサイン測定は重要であると考える。しかし、正しい測定方法についてはあまり知る機会がないのではないかと考えた。そこで、若者からお年寄りまでを対象に、自分たちが学んだバイタルサインの正しい測定方法を伝えることで、自分自身の体調の変化を把握し、体の異変に早めに気づくことができるようになるのではないかと考えた。

また、コロナ禍で大学の行事(文化祭など)も中止となっており、看護学生と市民の方々との交流の場は減少している。イベントを通じ、看護学生が日ごろどんなことを学んでいるのかを知っていただき、楽しみながら看護に興味を持っていただきたいと考えた。昨年度も同様のテーマでイベントを開催したところ参加者から「知らなかったことを知ることができた」という感想があり好評であったため、今年度も本事業を通して自身の健康や看護について関心を持ち、正しい知識を知る機会となることを願いイベントを実施した。

対象は一般市民であることから、分かりやすく伝えることを念頭に置き、展示の準備を行った。内容は①バイタルサイン(体温、血圧、脈拍、呼吸、SPO2)の正常値や正しい測定方法について、パワーポイントを用いた説明、②バイタルサイン測定に関するポスター展示、③血圧・SPO2測定・聴診の体験ブースである。パワーポイントによる発表は11:00~、13:00~、15:00~の3回実施し、各回30分程度の発表を行った。参加人数は25名と昨年の約半数程度であり、アンケートでは「わかりやすかった」「日常で役に立ちそうだ」という声が多かった。

#### 3 事業実施報告

日 時:令和4年12月17日(土)10:00~17:00

場 所:ヒロロ3階 多世代交流室1

対 象: 弘前市に住むすべての年代の方

集 客:事前に市内の施設・学校・町内会(計213件)にチラシを郵送した。

また事前にヒロロに許可をもらい、館内3か所でチラシの配布を行った。

参加人数:25名(男性7名、女性18名)。年代別では幼児3名、小学生1名、高校生3名、

30代6名、50代7名、60代以上5名。

## アンケート結果

1. イベントを知ったきっかけ

「本日初めて知った」7名、「知人、家族」7名、「新聞」3名

2. イベントに参加した理由(複数回答)

「生活に活かせると思ったから」4名、「たまたま開催していたから」7名、「興味があったから」7名、

「その他」4名 ・弘前医療福祉大学に入学するから ・家族の発表があったから

3. イベント内容について(複数回答)

「わかりやすかった」16名、「看護に興味が持てた」9名、

「新たな発見があった」7名、「分かりにくかった」0名、

「すでに知っている内容だった」1名、「その他」1名 ・話し方がとても優しかった

4. イベントは日常で役に立ちそうか

「はい」18名

理由:・母の介護のため ・自分の血圧が知れた ・血圧測定の結果が高かった

・周りで人が倒れたとき役に立ちそう ・体温計の正しい測り方が分かった

- ・看護師になるにあたって必要な知識だと思ったから
- ・血圧測定の仕方、聴診器の聞こえ方など
- ・血圧の時指2本分ゆとりを持たせることを知った
- ・普段使えないものをやって良い機会だった

「いいえ」0名

5. イベントの内容の他に知りたかったことはあるか

「はい」 2名 ・看護師の業務範囲 ・看護師国家試験の対策 「いいえ」 13名

## 構成員の役割(計13名)

事業統括者1名、事業統括補助者2名、経費管理担当者2名、ポスター・チラシ作成2名、 アンケート作成・集計2名、展示用ポスター作成13名、物品準備・管理4名

#### 実施スケジュール

8月上旬 バイタルサイン測定の練習開始

10月上旬 展示物の準備

11月中旬 ポスター・チラシの作成

12月17日 イベント開催

#### 4 補助金による支援の効果

- ・来場理由のアンケートでは、「今日初めて知った」という方が半数であった。チラシを作成 し、当日ヒロロへ来た方にチラシ配布を行った効果と考える。
- ・子供用の折り紙・パズル・ぬりえ等を用意し、親が血圧測定など行っている際に好評であった。折り紙は高齢者にも人気であった。

## 5 反省点・改善点

- ・準備が計画的に進まず、当初予定していた11月の開催を12月に延期した。これにより 会場の再予約が必要となり、広い会場が使用できなかった。
- ・チラシの郵送を行ったが、それによる集客が少なく、結果として来場者は少なかった。開催時期が冬季であったことも原因と考えられ、もう少し早めに開催できればよかった。
- ・会場入り口に看板を設置したらわかりやすかった。

#### 6 特記事項

特になし。

## 7 事業実施時の写真

#### 呼吸のための運動をしている様子



血圧測定ブース



子どもへの対応の様子



## 3. 成果発表会

事業の終了報告として、各学生団体が実施した事業の成果等を広く知ってもらうため、成果発表会を開催した。また、当日の発表会運営を本コンソーシアムの学生委員会「いしてまい」が行った。

## (1) 概要

日 時:令和5年2月19日(日)

13時00分~16時00分

場 所: 土手町コミュニティパーク 多目的ホール

対 象:市民、学生、大学・行政関係者等

(入場無料、申込不要)

来場者:約50名

視聴者:約100名 (アップルストリーム LIVE 配信)

主 催:大学コンソーシアム学都ひろさき

共 催:弘前市



# (2) 発表会の様子

# 【成果発表の様子】















## 表彰 (審査)

今年度採択された学生団体の事業内容や成果発表会での発表の様子等を審査し、点数が高い学生団体に「最優秀賞」を表彰する。

○審査員による審査

審査員 (5名) による審査で、事業内容や発表能力等について、5つの審査項目で、0点  $\sim 3$ 点の15点満点で採点する。

#### =審查項目=

- ① 学生だからこそ実施できた独自のアイデアで溢れる事業か。
- ② 地域課題の解決や地域の活性化に繋がる活動であったか。 (地域や市民への貢献性の高い事業であったか。)
- ③ 費用と効果、成果のバランスが取れているか。(費用対効果の高い事業であったか。)
- ④ 地域貢献に対する検証がされているか。
- ⑤ 与えられた時間を有効に使い、事業概要や事業成果をわかりやすく発表ができているか。
- ○来場者による審査

来場者全員による審査で、次の3項目に留意し、最もよい事業を実施したと思う学生団体を1つ選び、審査員による審査に1票1点を加点する。

○「最優秀賞」の決定について 審査の合計点数が高い学生団体に「最優秀賞」を表彰する。

最優秀賞

救急救命研究会(弘前医療福祉大学)



## (審査員による)講評

- ○コロナ禍においても、様々な地域活動を通して地域に貢献出来ていたと思う。県外出身者の 伝統を大事にしていこうという姿勢が素晴らしい。今後も課題等を解決しながら発展させて いってほしい。
- ○熱い心をもって活動している学生がたくさんいて感動した。感染症の影響で、人々の意識や 習慣が大きく変わり、地方への移住者が増えている。そこに学生の活動が繋がり、青森県の 発展に繋がるよう、継続して活動していただきたい。
- ○地域に貢献するということは、地域の人々の心を動かしていくことだと思う。相手のことを 考え、ニーズを把握していくことで、次のステージへ向けて活動していただきたい。
- ○企画の修正や改善を経て、活動していただいたことがわかった。自分たちのやりたいことと 地域がどう繋がっているのか、課題の設定と解決すべきことを把握し、どこまで掘り下げて 活動するかが、明確化や成果に繋がると思う。

#### 4. 事業成果

今年度は9団体の申請があり、前年度からの継続団体5団体に加え、新規団体2団体の計7団体が採択された。それぞれイベントの実施や調査活動等、各団体の特徴を活かした学生ならではのオリジナリティ溢れる活動を弘前市内各所で行った。これにより、学生と地域の人との交流が新たに生まれ、活動を通して、自分達が生活する弘前市の新たな魅力や団体の今後の目標や課題の発見に繋がったと考える。

#### 5. 次年度以降の実施に向けた改善点

今回はコロナ禍での開催であることと、アップルストリームでのオンライン同時配信を行うため、来場者は多くならないと予想した。実際には会場約50名及びアップルストリーム LIVE 配信視聴者約100名となった。仮に次年度はアップルストリーム配信をやめて会場聴講のみとシた場合、会場のキャパオーバーになる可能性が高いので、アップルストリーム LIVE 配信の継続や予算確保について状況を見極めながら検討していきたい。

## 【参考】同事業の要項

## (1) 応募できる団体

学生で構成される団体(ゼミ、研究室、課外活動団体等)で、次の要件の全てに該当するもの。 なお、既存の団体のほか、新たに組織する団体も対象とする。

- ・学生の活動を教員が実質的に指導していること。(名義のみの顧問は不可とする。)
- ・構成員が概ね5人以上であること。
- ・コンソーシアム構成大学の学生で組織された団体であること。

#### (2) 対象事業

弘前市の地域活性化や地域課題の解決を目的に実施する事業で、次に掲げる要件の全てを満たしているもの。

- ・弘前市内で実施される事業であること。
- ・弘前市民を対象にした事業であること。
- ・令和4年12月31日で完了する事業であること。

#### (3) 補助金額と補助対象経費

- ① 補助金額
- ・単一の団体が事業を行う場合:上限100,000円
- ・異なる大学の団体が連携して事業を行う場合:上限200,000円
- ② 補助対象経費

事業を実施するために直接必要な経費とする。

(講師等謝礼、旅費、消耗品費、原材料費、燃料費、印刷製本費、通信運搬費、保険料、会場等使用料、賃借料及びその他本コンソーシアム会長が適当と認めたもの)

#### (4) 事業審査及び審査基準

応募書類及び申請団体へのヒアリング等を実施し、次の10項目について審査し、決定する。

#### 学生地域活動支援事業

○的確性	○効果性	○適切性	○自主性	○実現性
○公益性	○地域性	○費用妥当性	○将来性	○独創性

令和4年度活動報告

Ⅱ. 連携推進事業

## 5大学合同シンポジウム

#### 1. 趣旨

来場者が興味を持ちやすいテーマを設定し、市民向けの公開シンポジウムを開催する。また、会場内でコンソーシアムのパネル展示等も併せて行い、コンソーシアムをより多くの人に知っていただけるようPR活動をする。

#### 2. 概要

#### ○テーマ

「宇宙でわたし達のからだはどうなるのでしょうか」

#### ○内容

最近、一般の人たちが短期間の宇宙旅行を経験し、メディアを賑わしています。莫大なお金を払って宇宙空間、すなわち微小無重力(マイクローG)を体験し地上約400kmから地球を見下ろし楽しんでいます。

地球上(1-G)と環境が全く異なる宇宙では、私達のからだの形態や機能にどのような変化があるのでしょう。またこのような環境をうまく利用してからだの健康づくりのための研究が進められています。

#### ○日時

令和4年7月9日(土) 13時30分~15時00分

#### ○聴講方法

- ・公開視聴会場(土手町コミュニティパーク)
- ・オンライン配信(アップルストリーム) https://applestream.jp/12359/ ※LIVE 及びアーカイブ

#### ○基調講演講師

吉岡 利忠 氏(前弘前学院大学長)

#### ○聴講者

公開視聴会場: 10名オンライン配信(LIVE): 70名オンライン配信(アーカイブ):500名

#### ○共催

弘前市



#### 3. シンポジウムの様子

【司会】鳥潟 貴

(弘前大学社会連携部社会連携課長・大学コンソーシアム学都ひろさき企画運営委員)

#### 基調講演

「宇宙でわたし達のからだはどうなるのでしょうか」

講師:吉岡 利忠 氏(前弘前学院大学長)

基調講演では、『宇宙でわたし達のからだはどうなるのでしょうか』をテーマに、前弘前学院大学長 吉岡 利忠 先生を講師に迎え、一般の人たちが短期間の宇宙旅行を経験しメディアを賑わしているなかで、「宇宙空間(マイクローG)におけるからだの変化」や「宇宙空間における運動の重要性」について述べられた。

会場を訪れた参加者からは、「宇宙空間では腰痛はあるのか」等の質問があり、普段は接する機会が少ないテーマについて知見を増やす有意義なシンポジウムとなった。

本シンポジウムは、人数制限下での公開視聴会場及び青森県弘前市内のローカルニュースを扱う動画配信サービス(アップルストリーム)でのライブ配信によるハイブリッド形式で実施し、当日は公開視聴会場10名、ライブ配信からの視聴が70名、計80名が聴講した。

なお、事後視聴も可能である。



吉岡 利忠 氏



ご講演の様子



質疑応答の様子

#### 4. アンケート

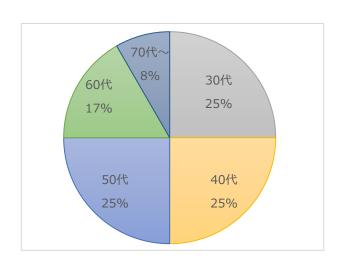
○来場者数 : 10名 ○当日視聴者数 : 70名

○事後視聴者数 : 500名 ○アンケート回答者数 : 12名

#### ○回答者内訳

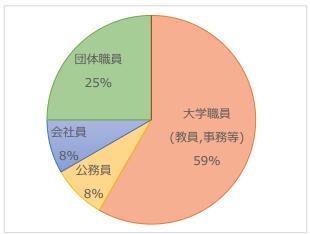
#### 【年代別】

	回答数 (%)
~10代	0 ( 0 %)
20代	0 ( 0 %)
30代	3 ( 25%)
40代	3 ( 25%)
50代	3 ( 25%)
60代	2 ( 17%)
70代~	1 ( 8%)
計	1 2 (100%)



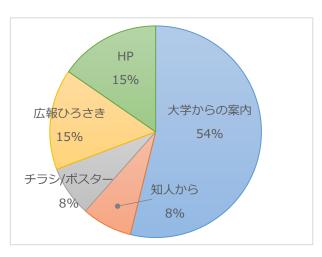
#### 【職業別】

	回答数 (%)
大学職員(教員,事務等)	7 ( 59%)
学生	0 ( 0 %)
公務員	1 ( 8%)
専業主婦(夫)	0 ( 0 %)
会社員	1 ( 8%)
パート・アルバイト	0 ( 0 %)
団体職員	3 ( 25%)
計	1 2 (100%)



#### ○今回のシンポジウムを何で知ったか。

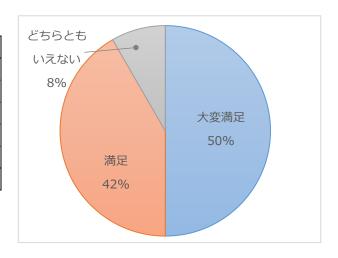
	回答数 (%)
①大学からの案内	7 ( 54%)
②知人から	1 ( 8%)
③チラシ/ポスター	1 ( 8%)
④広報ひろさき	2 ( 15%)
⑤SNS/ブログ	0 ( 0 %)
<b>⑥</b> Н Р	2 ( 15%)
計	1 3 (100%)



#### ※複数回答あり

#### ○講演について

	回答数 (%)
① 大変満足	6(50%)
② 満足	5 ( 42%)
③ どちらともいえない	1 ( 8%)
④ ややもの足りない	0 ( 0%)
⑤ もの足りない	0 ( 0 %)
計	1 2 (100%)



#### ○感想等

#### 【シンポジウム感想等】

- ・宇宙医学について全く知らなかったので、宇宙環境下で人間のからだに及ぼす影響に興味がわ きました。
- ・ 貴重なご講演ありがとうございました。後半部分がお聴きできなかったので続きをお聴きできる機会があれば嬉しいです。
- ・宇宙での身体について難しかったですが勉強になりました。医療への応用についてをもう少し 聞きたかったです。
- ・とても分かりやすい言葉を使っての講演だったので、楽しくまた興味深く聴くことができました。ありがとうございました。

#### 5. 事業成果

本年度も引き続き、新型コロナウイルス感染症対策のため入場制限を設け、公開視聴会場及び オンライン配信(アップルストリーム)との同時開催となった。

会場を訪れた参加者からは、「未来志向の内容で、元気を頂いた」「宇宙医学の今後を期待したい」などの意見があり、普段接する機会の少ないテーマについて、知見を増やす大変有意義なシンポジウムとなった。

## 各大学公開講座等助成事業

#### 1. 各大学公開講座等助成事業とは

本コンソーシアムを構成する弘前市内5大学が行う公開講座等事業(以下「事業」)の実施を補助することにより、各大学の特色を活かしながら蓄積する知を広く市民に向けて発信・還元することで、高等教育機関が集結する「学都ひろさき」を強く印象づけるとともに、市民が本コンソーシアム及び大学を身近な存在であると感じ、市民による大学の活用を促すことを目的とする。

#### 2. 補助を行った事業

#### (1) 放送大学青森学習センター

事業名称	放送大学青森学習センター公開講演会「地域のリーダーに学ぶ講演会」	
主催	放送大学青森学習センター	
内容	広く学生や地域住民を対象に、地元で活躍するリーダーを講師に迎え、講師のこれまでの実績や経験から、地方に住みながら夢をつかむ実行力や若者の夢を支援するための人づくりについて学び考える機会に併せ、放送大学及び青森学習センターについて知ってもらう機会とした。 内容は、当センター所長でピアニストの浅野清が「ベートーヴェンのピアノ・ソナタと共に」と題して、これまでの長い演奏活動を振り返り、幼少期のピアノとの関わり方がどう変わっていったか、そして青森でベートーヴェン「32のピアノ・ソナタ」全曲を弾くに至った経緯などを話しながら、名曲3曲を演奏した。	か送大学 青森学習センター 公開講演会  ***********************************
日時	令和4年12月4日(日)13:00~15:00	
会場	弘前大学50周年記念会館 みちのくホール	





実施状況等





事業の様子

#### (2) 弘前医療福祉大学短期大学部

事業名称	弘前医療福祉大学短期大学部「青森県産食材を使った料理作品展」
主催	弘前医療福祉大学短期大学部 別科 調理師養成1年課程
内容	学習成果発表の場として毎年、青森県 産食材を使用した日本・西洋・中国料理の コースメニューを考案・製作して展示・公 開し、調理実習担当講師による表彰のほ かに、一般来場者による投票を実施した。 また、津軽を代表する郷土料理として 昔から親しまれてきた「粥の汁」を、若い 世代の視点から工夫した「アレンジ粥の 汁」として試食を提供した。 さらに、県産食材を使用した料理を紹 介することにより、県産食材の消費拡大 につながることを願うとともに「食」に かかわる様々な話題や情報を発信した。  事業チラシ
日時	令和5年2月25日(土)11時30分~15時00分

 会場
 土手町コミュニケーションプラザ1階

 ○参加者数: 110名

 実施状況等

### \_\_(3) 弘前大学

事業名称	令和4年度市民ボランティア講座	
主催	弘前大学地域創生本部ボランティアセンター	
内容	本講座は、家庭における虐待や、学校等におけるいじめが社会問題になっている中で、市内の子ども居場所づくりや子ども食堂に携わるなど、子どもの支援に関わるスタッフや、保護者、地域住民と共に「子どもの権利」について学び、「子どもの権利」について学び、「子どもの権利」について学び、「子どもの権利」の意義を理解することを目的として実施した。	令和4年度第3回市民ボランティア議座  「子どもの権利条例」  →青森市子どもの権利権議委員に聞く  ※4年の12日本ができるというにもの権利権議委員に関く  ※4年の12日本ができるというにものできるというできるとなった。  ※5年の大きに対象できるというできるというできるとなった。  第33 2月18日(土) 14:00~16:00  ※5年の大きなというできるというできるというできるとなった。  第35 2月18日(土) 14:00~16:00  ※5年の大きなというできるというできるというできるとなった。  第35 2月18日(土) 14:00~16:00  ※5年の大きなというできるとなった。  ※5年の大きなというできるというできるというできるとなった。  ※5年の大きなというできるというでき
日時	令和5年2月18日(土)14:00~16	6:00

会場	弘前大学人文社会科学部4階多目的ホール	
実施状況等	<ul><li>○参加者数: 12名</li><li>事業の様子</li></ul>	

## (4) 柴田学園大学短期大学部

事業名称	特別公開講座 「岩木山の恵みを楽しもう第3弾〜あなたの知らない山の世界〜」
主催	柴田学園大学短期大学部 地域文化センター
内容	弘前を中心とした津軽地域の特色を知り、そこから地域の問題について学ぶ本学独自の科目を一般や中・高校・大学生向けに開講した。また、津軽を象徴する山であり、津軽富士と呼ばれる岩木山周辺の自然やその地域での暮らしについて紹介し、地元弘前の知られざる魅力等も講演いただいた。  また、市場は、中央では、中央では、中央では、中央では、中央では、中央では、中央では、中央で
日時	令和4年11月5日(土)10:00~12:00
会場	柴田学園大学短期大学部

○参加者数:28名





実施状況等





事業の様子

#### (5) 柴田学園大学

(5) 宋田子園	八丁 	
事業名称	絵本のごちそうクッキングー親子時間を楽	しもうー
主催	柴田学園大学 地域資源活用センター	
内容	子どもの想像力や自立心を高めるため、絵本の世界を親子で楽しみながら「よんで つくって たべて たのしむ」をねらいとした、親子対象の体験的活動を行った。①絵本「ポコポコゼリー」「さくらんぼひめのほうせきゼリー」などの読み聞かせをするとともに絵本に出てきたおやつ【ゼリー】の調理に親子で取り組んだ。②絵本「じゃがいもひめとさつまいもひめ」「じゃがいもじゃがじゃがさつまいも」などの読み聞かせをするとともにさつまいもを使ったおやつ【スイートポテト】の調理をする予定であったが中止とした。	# (4 本 の ご ち で う

日時	①令和4年 7月16日(土) 10時00分~12時00分 ②令和4年11月26日(土) 10時00分~12時00分(中止)
会場	弘前市学習センター 調理室 視聴覚室
実施状況等	○参加者数: 9名 (4組)

#### 3. 補助事業実施による成果

本コンソーシアム構成機関が、コロナ禍によりこれまでのスタイルでは開催が困難ななかで、一部中止の事業も生じたが、各大学の特色を活かしたテーマを設定し、感染対策を講じながら公開講座を開催し、各大学が持つ知的シーズを提供した。これにより、高等教育機関が有する学術機能を地域社会に還元し、弘前市における教育・文化等の向上に寄与し、地域振興に貢献した。加えて、市民に「学都ひろさき」を印象づけ、市民による大学の活用を促すことが出来た。

#### 【参考】同事業の要項

#### (1) 補助対象事業

次に掲げる条件のいずれかを満たす事業を補助対象事業とする。なお、学園祭で市民向けの公 開講座として開催する事業は、補助対象外とする。

- ① 広く一般市民を対象とするもの
- ② より市民の目に触れ、より市民が参加しやすい形態で行われるもの(街なかの施設等、大学外の会場で行うなど)
- (2)補助金の交付額と補助対象経費
- ① 補助金の額は、原則、1大学あたり上限50,000円とする。

- ② 補助対象経費は、事業を実施するために必要な以下の経費とする。
  - 会場借上費
  - ・チラシ・ポスター等印刷費 (制作費)
  - ・チラシ・ポスター等発送費
  - ・事業実施に係る消耗品費
  - 外部講師謝金
  - ・各号に掲げるもののほか、本コンソーシアム会長が必要と認めたもの

令和4年度活動報告 Ⅲ. 学生交流事業

# 学生団体シンポジウム ~5大学 と 学生1万人 が弘前をつくる~

#### 1. 趣旨

近年、地域に関心を持ち、地域活性化や地域貢献、PBL (Problem Based Learning:問題解決型学習法)として、ゼミや研究室、課外活動で、地域に出て活動をする学生が増え、それぞれに一定の成果をあげている。

しかし、団体同士の繋がりは薄く、連携がとれないことや特定の地域のみの活動、学生の地域 に根ざした活動を知らない市民が多いことが課題である。

そこで、学生の活動を広く公開することで、学生が弘前市を盛り上げている現状を多くの市民が知ることのほか、大学の枠を越えた学生同士の交流の場をつくり、団体同士の繋がり強化、さらなる活発な活動を目指す。

#### 2. 概要

学生団体シンポジウム

~5大学 と 学生1万人 が 弘前をつくる~

○日時

令和5年2月19日(日) 13時00分~16時00分

○会場及び配信方法

会場: 土手町コミュニティパーク 多目的ホール

配信:アップルストリーム配信

URL https://applestream.jp/13900/

○プログラム

13時00分 : 開会(挨拶等)

13時05分 : 学生地域活動支援事業 成果発表会

14時15分 : 休憩

14時25分 : 学生団体活動発表

14時45分 : 学生地域活動支援事業 表彰

15時15分: 講評(学都ひろさき企画運営委員)

16時00分 : 閉会

○共催

弘前市

○来場者数

約50名(学生、市民、大学及び行政関係者等)

○LIVE 配信視聴者数

約100名(アーカイブ配信視聴数:約300回)



#### 3. 参加学生団体

地域活性化サークル (弘前学院大学)



2020年に創立された当サークルは、弘前学院大学の看護学生約25名のメンバーで構成されている。ナークル名の通り、地域の活性化を 目的に、飲食店やイベントの紹介及び参加、ボランティアをメインに 活動している。

[Instagram] @tiikikasseika\_hirogaku

ストリートダンスサークルA.C.T. (弘前大学)

ACT

「弘前・青森にダンスの楽しさを広めること」を目標に活動している ストリートダンスサークル。公演開催やイベントへの参加が主な活動 内容である。活動が制限されていた時期を経て、以前の活気を取り戻 せるように活動に励んでいる。

[Twitter] @act\_hirosaki [Instagram] @act\_hirosaki

弘大囃子組 (弘前大学)



青森の伝統であるねぶたを音で飾る囃子。そんな囃子を楽しみつつ、 多くの人に知ってもらうため、様々なイベント・祭りに参加している。 青森の囃子を盛り上げます!

[Twitter] @h\_u\_hayashigumi [Instagram] @hirodai884\_gumi

食育研究部 4 (柴田学園大学短期大学部)



子どもたちが初めて郷土料理を知る機会が、給食であることが増え ている現状をふまえ、食育教材を製作・貸出し、もっと知ってもらう ための活動している。

弘前医療福祉大学 救急救命研究会 5 (弘前医療福祉大学)



私たちは、普段学んでいる講義や演習に加えさらに知識・技術の向 上を目指すことを目的として、応急手当普及啓発活動やイベント等に おける救護支援活動などに取り組んでいる。 [Instagram] @hirosakiiryou\_qq

成

waku waku club 6 (弘前医療福祉大学)



将来、一社会資源となる専門職という立場で、地域住民同士の交流 を図るとともに、住民ひとり一人の健康増進につなげることを目的に 活動してきた。併せて、そこから地域全体に波及させていく支援の方 法を学んでいる。



看護技術研究会は地域の方々に看護の視点から生活に役立つ情報や技術を周知し、看護に関心を持ってもらうために活動している。また、日々の看護技術について学生同士で交流をしている。

多学生団体coco-cam (弘前大学)



地域と医療の架け橋となる。

弘前大学の医学生を中心とした学生団体。市内にある「医Café SUP?」の運営をはじめ、医療に関わるあらゆる企画をおこなっている。 [HP] https://sup-icafe.com/ [instagram] @coco\_cam.hirosaki

9 学生委員会いしてまい (大学コンソーシアム学都ひろさき)



弘前市内の大学に通う「弘前を活性化させたい!」という意思を持った学生が、大学の壁を越えて集まり、各大学教職員や弘前市のパックアップのもと活動している。

[Instagram] @isitemai\_hirosaki

活動発

#### 4. 会場の様子





進行役:学生委員会いしてまい













#### 5. アンケート

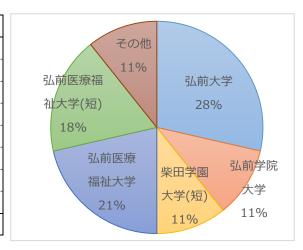
○対象者 : 参加学生等 ○回答者数/参加者数 : 28名/50名

○回答率 : 56%

#### ○回答者内訳

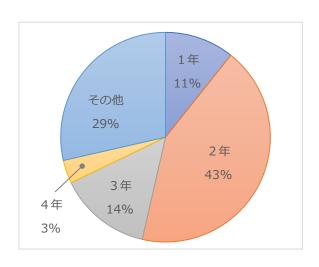
#### 【所属別】

2/3/11/07/2	
所属等	回答数 (%)
A. 弘前大学	8 ( 2 9 %)
B. 弘前学院大学	3 ( 11%)
C. 柴田学園大学	0 ( 0%)
D. 柴田学園大学(短)	3 ( 11%)
E. 弘前医療福祉大学	6 ( 2 1 %)
F. 弘前医療福祉大学(短)	5 ( 18%)
G. 放送大学	0 ( 0%)
H. その他	3 ( 11%)
計	28(100%)



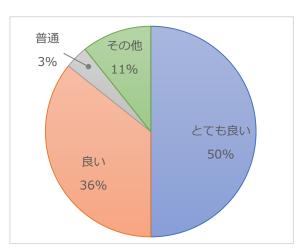
#### 【学年別】

学年	回答数 (%)
① 1年	3 ( 11%)
② 2年	1 2 ( 4 3 %)
③ 3年	4 ( 14%)
④ 4年	1 ( 4%)
⑤ その他	8 ( 29%)
計	28(100%)



## ○「学生団体シンポジウム」の内容について。

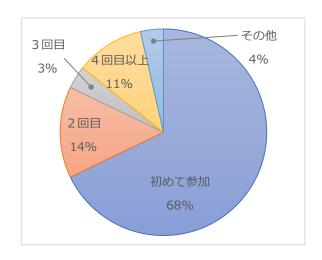
	回答数(%)
A. とても良い	14(50%)
B. 良い	10(36%)
C. 普通	1 ( 4 %)
D. 悪い	0 ( 0 %)
E. とても悪い	0 ( 0 %)
F. その他	3 ( 11%)
計	28(100%)



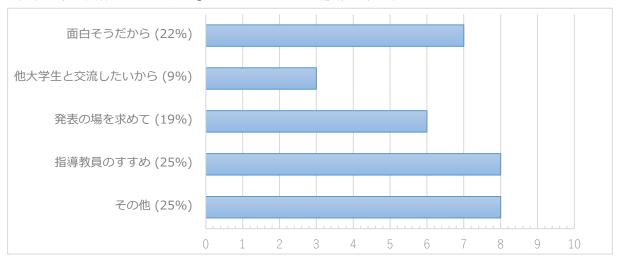
#### ○「学生団体シンポジウム」への参加について

#### (1)類似イベント等への参加経験

	回答数 (%)
A. 初めて参加	19(68%)
B. 2回目	4 ( 14%)
C. 3回目	1 ( 4 %)
D. 4回目以上	3 ( 11%)
E. その他	1 ( 4 %)
計	28(100%)



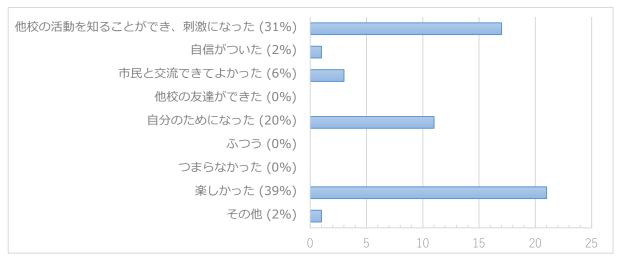
#### (2)「学生団体シンポジウム」に参加した理由(複数回答可)



#### ※【その他】の理由 (一部抜粋)

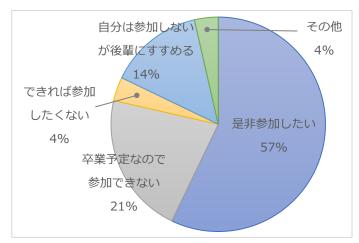
- ・ 例年参加しているため。
- ・大学生が弘前についてどのように考え、どのような活動をしているか知りたかったから。

#### (3)「学生団体シンポジウム」に参加した感想。



#### (4) 来年も「学生団体シンポジウム」に参加したいか。

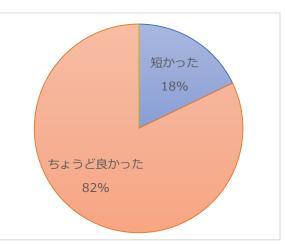
	回答数 (%)
A. 是非参加したい	16(57%)
B. 指導教員にすすめられれば参加すると思う	0 ( 0 %)
C. 卒業予定なので参加出来ない	6 ( 2 1 %)
D. できれば参加したくない	1 ( 4%)
E. 自分は参加しないが後輩にすすめる	4 ( 14%)
F. その他	1 ( 4%)
計	28(100%)



#### ○「学生団体シンポジウム」の会場・時間配分について

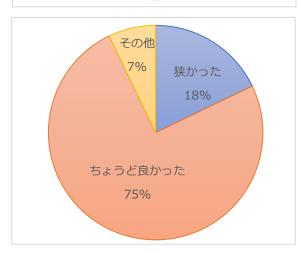
#### (1)活動発表の時間

	回答数(%)
A. 短かった	5 ( 18%)
B. ちょうど良かった	23(82%)
C. 長かった	0 ( 0%)
D. その他	0 ( 0%)
計	28(100%)



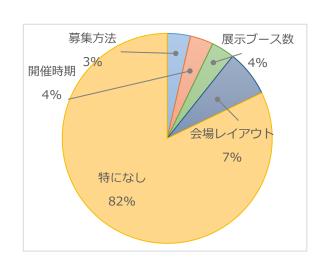
#### (2) ポスター展示ブースの広さ

	回答数 (%)
A. 狭かった	5 ( 18%)
B. ちょうど良かった	21(75%)
C. 広かった	0 ( 0%)
D. その他	2 ( 7 %)
計	28(100%)



#### ○「改善すべき」と感じた点(複数回答可)

/ · m / g = - · a · · · · · · · · · · · · · · · · ·	. (12422 11 1 14 17	
	回答数 (%)	
A. 募集方法	1 ( 4%)	
B. 開催時期	1 ( 4%)	
C. 開催場所	0 ( 0%)	
D. パンフレット	0 ( 0%)	
E. 発表団体数	0 ( 0%)	
F. 展示ブース数	1 ( 4%)	
G. 会場レイアウト	2 ( 7%)	
H. その他	0 ( 0%)	
I. 特になし	2 3 ( 8 2 %)	
計	28(100%)	
V		



#### ※【改善すべき点】の意見 (一部抜粋)

- ・カメラがあるため、通路が少し狭かったので、椅子を減らしたりすると移動がスムーズであったと思う。
- ・認知度をあげるために、SNS等を活用して何か興味がわきやすい(学生が)方法で周知できたら良いのかなと思いました。

#### ○自由記載 (一部抜粋)

- ・対面の方がやはり、参加者同士のつながりができるので良いなと思いました。
- ・他団体の活動内容とその効果を知ることができて、とても学びになった。 もっと参加する団体を増やすことで、弘前市の人々の質を高めることが可能になると考える。
- ・新聞スリッパ・ツナ缶のランタンは勉強になりました。
- ・学生の皆さんが、いろいろな活動をしていることがわかり、おもしろかったです! 今後も続けていただけたらと思います。

#### 6. 事業成果

3年ぶりのイベント開催となり、会場には約50名の市民、学生、関係者で賑わいを創出することができた。普段関わることが無い異なる大学の学生が意見交換を行うことで、大学間交流に加え、互いの活動情報を共有することもでき、参加者の満足度の高いイベントになった。

また、アップルストリームのLIVE 配信では約100名の視聴があり、見逃し用のアーカイブ配信では約10日間(令和5年3月31日時点)で約300回の視聴があった。これにより、当日来場出来なかった市民の方にも広く活動内容を周知することが出来た。

#### 7. 反省点 改善点

- ○今年度は久しぶりの開催にも関わらず、参加団体・来場者数が以前ほど増えなかったため、次 年度は事業の周知について改めて検討したい。
- ○一つの会場内にポスター展示ブースと活動発表スペースを設置したことにより、会場内の賑わいを創出することが出来た半面、会場が狭いという意見も見られたため、もう少しレイアウトの工夫が必要である。

## ひろさき移動キャンパス

#### 1. ひろさき移動キャンパスとは

本コンソーシアムを構成する5大学が共同で「学都ひろさき」の魅力を県外にアピールすることにより、弘前で学びたいという学生の増加を目指し、また、他地域コンソーシアムとの交流を深め、本コンソーシアムの充実を図ることを目的として、北海道函館市の「キャンパス・コンソーシアム函館」が主催する「HAKODATEアカデミックリンク」に、本コンソーシアム構成機関の所属する学生団体がブース出展をする。

#### 2. 概要

○日時

令和4年11月10日(木)~12月4日(日)

○開催方法 アカデミックリンク2022特設ページによるオンライン開催

- ○参加団体
  - ①弘前大学いしてまい
  - ②弘前大学ひろエネ



#### 3. 発表内容

- ○参加形態
  - ブース出展
- ○発表内容
  - ①弘前大学いしてまい

いしてまいとは「大学コンソーシアム学部ひろさき」に加盟している弘前市内 5 大学の学生が「弘前のために何ができるのか」を考え企画・実行をしている学生団体です。各大学教職員や弘前市役所職員のバックアップのもと、地域の自立と発展を図っていくことを目的としています。いしてまいは津軽弁で「良すぎて仕方がない」という意味を表しており「弘前市のことを知りたい」、「地域に関わった活動をしてみたい」という思いを持った学生たちが、日々楽しく活動しています。主な活動は「飲食店企画」、「衣類回収ボックス設置」、「伝統文化企画」です。今回は活動の目的・手段・成果・今後の課題について発表します。

#### ②弘前大学ひろエネ

『再エネ・省エネをもっと身近に!』をテーマに、親子向けの再エネ・省エネ工作ワークショップを開催している学生団体です。工作・実験ワークショップは、大学生との多世代の交流や学習支援にもなっており、保護者の方からの評価も高く、年々参加者が増加してきました。『まじめにやらない、何より楽しむ』ことを意識し、お子さん・保護者・大学生間の対話を重視し、子どもの独創性の余白を残したワークショップになっております。教育関係者の方、こどもの居場所づくりをされている方、『いっしょにこんなことできないかな?』などございましたら、ご連絡いただけますと幸いに存じます。

#### 4. 会場の様子等

#### ① 弘前大学いしてまい



#### ② 弘前大学ひろエネ



#### 5. 参加による成果・効果(学生委員会からの報告)

今年度は新型コロナウィルス感染症の影響でオンライン上でのブース展示やステージ発表による開催となった。これまでの対面でのブース発表や交流が出来なくなった反面、オンライン開催となったことで、経費の関係で函館にいけなかった学生団体が、ブース発表や函館の学生団体の活動内容を知ることが出来たことは、今後の弘前市内の学生団体にとってプラスに働いたと感じている。

#### 6. 今後の活動に向けて

これまでは本コンソーシアムの学生委員会「いしてまい」が主に本事業へ参加していたが、 今年度は2団体の弘前市内の学生団体が参加した。次年度の開催方法にもよるが、弘前市内の 学生団体の活動を県外へさらに発信できるよう努めていきたい。

## 学生委員会「いしてまい」活動

#### 1. 学生シンポジウム~魅せる、認める、つながる~

#### (1) 概要

・開催日時:2022年8月27日(土) 13時00~16時00分(一般公開時間) 2022年8月28日(日) 13時00~16時00分(一般公開時間)

・会 場: JR弘前駅2F津軽ラウンジ

・公開対象:中学生・高校生・一般市民ほか

• 入 場 料:無料

・内 容:青森市内5大学・短期大学の学生,青森県内高校生等による学修・研究発表

その他関連団体による発表

・主 催:学生団体@ぼくらしnext

· 共 催:特例認定特定非営利活動法人 SEEDS NETWORK

・協 力: JR 東日本秋田支社弘前駅

#### (2) イベントプログラム

8月27日 (土)		8月28日 (日)	
13:00~	弘大 MushRoom	13:00~	ひろエネ
13:15~	CoCo-Cam医 Café SUP?	13:15~	いしてまい
13:30~	ひろさき地域活動応援隊 FUYAKU	13:30~	弘前大学相撲部
13:45~	弘前学院大学 地域活性化サークル	13:45~	弘城ねぷた愛好会
14:00~	トークセッション	14:00~	トークセッション
14:40~	弘城ねぷた愛好会	14:40~	Voice Up Japan 弘前大学支部
14:55~	青森県から届け隊 canvas	14:55~	弘前大学忍者部
15:10~	学生団体@ぼくらし next	15:10~	学生団体@ぼくらし next
15:25~	ピアノの会	15:25~	ピアノの会

#### (3) いしてまいの発表内容

「学生が主体となり、地域の学生、市民のニーズやお困りごとを考え企画の立案・活動をする」という活動理念と目標のもと、主に飲食店SNS紹介や衣類回収ボックス設置、伝統工芸SNS紹介という活動を行なっている。発表ではそれぞれの活動に対する現在の成果と、今後の課題を紹介した。

#### (4)発表の様子









#### 2. 学生団体交流会&ワールドカフェ

#### (1) 概要

·開催日時:2022年12月18日(日) 9時00分~16時30分

・会 場:青森総合社会教育センター 大研修室

#### (2) 内容

· 9 時 3 0 分 ~: 学生団体交流会

青森市の大学・高校生を中心に、県内で活動する団体の交流。自団体の

紹介、活動内容の発表を複数回行い、トークする。

・13時30分~: ワールドカフェ (13時30分~16時30分)

「大切な人へ伝えたい思い」をメインテーマに、各テーブルに用意された全15テーマ(10年後の自分へのメッセージ、日常でできるSDGs、こんな町に住みたい等)の中から興味のあるものを選び、語り合う。

#### (3) 発表の様子







## いしてまいとは

「大学コンソーシアム学都ひろさき」 に加盟する市内5大学の学生団体

各大学教職員や市役所職員のバックアップの もと、地域の自立と発展を図っていく。

#### 3. 弘前市内飲食店紹介

#### (1)目的

新型コロナウィルス感染症の感染拡大により、弘前市内における学生の学習環境や課外活動は大きく制限を受け、未だ経済的に困っている学生も多い状況である。また、多くの飲食店が苦境に陥っている。

学生委員会「いしてまい」は、昨年度から引き続きSNSに飲食店を掲載することで、 学生に対して情報発信するとともに、弘前市内の地元飲食店の活性化に繋げることを目的 に企画を立ち上げた。

#### (2) 方法

実際に店舗へ出向いて試食及び取材を行いSNSに掲載する。あわせて、一覧で閲覧できるような媒体の作成を目指し、継続的な情報発信につとめる。

#### (3)調査・発信時期

2021年3月~随時

#### (4) 掲載記事









#### 4. 活動を通して

手探り状態のなか、昨年度から継続している飲食店紹介について数店舗発信できたり、学生シンポジウムやHAKODATEアカデミックリンク等、たくさんのイベントに招待していただいた。他大学の学生や団体の方々と交流できたことはメンバーにとっても、良い活力になった。

次年度は、既存の活動の課題解決及び発展させていくことに加え、伝統工芸の紹介や交流の場を設けるなど、新しいことにも積極的に挑戦するとともに、地元弘前の魅力をたくさんの方へ発信していけるよう、メンバー一丸となって活動していきたい。

# 大学コンソーシアム学都ひろさき 令 和 4 年 度 活 動 報 告 集

発 行 令和5年3月31日

編 集 大学コンソーシアム学都ひろさき

印 刷 やまと印刷株式会社 弘前市神田4丁目4-5 TEL 0172-34-4111

## 成





## 弘前大学

〒036-8560 青森県弘前市文京町1 [TEL] 0172-36-2111 (代表) [ホームページURL] https://www.hirosaki-u.ac.jp/







#### 弘前学院大学

〒036-8577 青森県弘前市稔町13-1 [TEL] 0172-34-5211 (代表) [ホームページURL] https://www.hirogaku-u.ac.jp/





#### 柴田学園大学

〒036-8530 青森県弘前市清原1-1-16 [TEL] 0172-33-2289 (代表) [ホームページURL] https://univ.shibata.ac.jp





#### 弘前医療福祉大学 弘前医療福祉大学短期大学部

〒036-8102 青森県弘前市小比内3-18-1 [TEL] 0172-27-1001 (代表) [ホームページURL] https://www.hirosakiuhw.jp/





#### 放送大学 青森学習センター

〒036-8561 青森県弘前市文京町3 弘前大学コラボ弘大7階 [TEL] 0172-38-0500 (代表) [ホームページURL] https://www.sc.ouj.ac.jp/center/aomori/

## 大学コンソーシアム学都ひろさき

〒036-8560 青森県弘前市文京町1 (弘前大学社会連携部社会連携課内) [TEL] 0172-39-3160 [FAX] 0172-39-3919 [E-mail] conso@hirosaki-u.ac.jp http://www.consortium-hirosaki.jp/